

県営圃場整備事業(昭和55年度)
埋蔵文化財緊急発掘調査報告

高 尾 第 1
本 郷 原 林
田 切 平 沢

1981

長野県上伊那郡飯島町
南信土地改良事務所



序

飯島町においては、昭和48年から県営は場整備事業が実施され、今年度は飯島地区第26工区高尾地籍、七久保地区第26工区本郷原林地籍、田切地区第33工区平沢地籍が実施されています。

当地籍は、古くから集落が発達した地域であり、文化財保護の立場から、飯島町遺跡調査会に依頼し調査を行ないました。

幸いにも南信土地改良事務所の御配意と、県教育委員会文化課の御指導のもとで、優秀なる調査団の先生方により大きな成果をあげられたことは、感謝にたえません。

出土品については、飯島町陣嶺館に展示し一般の方々に見ていただく予定です。

調査報告書の刊行に当たって関係各位に対し心から感謝申し上げる次第であります。

昭和56年3月15日

飯島町教育委員会教育長

熊崎安二



凡 例

1. この調査は、県営ほ場整備事業に伴なう緊急発掘調査で、調査は南信土地改良事務所の委託により、飯島町が実施した。
2. 本調査は、昭和55年度中に業務を終了する義務があるため、報告書は図版を主体とし、文章記述はできるだけ簡略にし、資料の再検討は後日の機会にゆずることにした。
3. 本文の執筆は、友野良一、伊藤 修が行なった。
4. 本報告書の編集は、主として飯島町遺跡調査会があたった。

〔発掘参加者名簿〕

○高尾第1遺跡

北原健三、野村智利、中村ゆきゑ、中村恵子、熊崎静子、知久登美子、小林よし子、熊崎文恵、唐沢辰男、小林初子、木下みさお、小林一藏、熊崎せき、小林広世、宮下貞夫、宮下高治、羽生ゆき、堀越としゑ、上山利男、田中直敏、堀越智、北原良子、高坂文四郎、北原甲子三、熊崎三郎、北原政子、富永芳一、中村正純

○本郷原林遺跡

桃沢匡行、中島淑雄、松下国夫、吉沢由子、星野泰志、田中正彦、高坂文四郎、堀越 智、林 龍松、伊藤幸一、満沢 宏、米山宇一、中島少翁一、森谷慶福、矢沢亀五郎、新井 勝、田中直敏、宮下貞夫、唐木孝治、三松ますみ、山口藤子、山岸藤太郎、桃沢和子、小林広世、佐々木大治、米山千勢、鐵田正己、林 晴子、原ふみ子、宮下高治、米山正一、山口玲子、北原甲子三、富永芳一、

○田切平沢遺跡

小林嘉男、北原甲子三、平沢 孝、森谷八雄、小池篤人、小林一剣、小林栄子、森谷美枝、宮脇綾子、宮脇万枝、林かね子、松崎研定

高尾第1遺跡

目 次

序

凡 例

目次、挿図目次、図版目次

第Ⅰ章 遺跡の概観	(1)
第1節 位置	(1)
第2節 地形・地質	(1)
第Ⅱ章 発掘調査の経過	(3)
第1節 発掘調査に至るまで	(3)
第2節 調査日誌	(3)
第Ⅲ章 遺構	(6)
第Ⅳ章 遺物	(40)
第Ⅴ章まとめ	(54)

挿 図 目 次

第1図 位置図 (1 : 100,000)	第2図 地形図 (1 : 2,000)
第3図 遺構配置図 (1 : 400)	第4図 第1号住居址 (1 : 80)
第5図 第2号住居址 (1 : 80)	第6図 第3号住居址 (1 : 80)
第7図 第4号住居址 (1 : 80)	第8図 第5号住居址 (1 : 80)
第9図 第6号住居址 (1 : 80)	第10図 第7号住居址 (1 : 60)
第11図 第8号住居址 (1 : 60)	第12図 第9号住居址 (1 : 80)
第13図 第10号住居址 (1 : 80)	第14図 第11号住居址 (1 : 80)
第15図 第14号住居址 (1 : 80)	第16図 第15号住居址 (1 : 80)
第17図 第13号・第16号住居址 (1 : 80)	第18図 第17号住居址 (1 : 80)
第19図 第18号住居址 (1 : 80)	第20図 第20号住居址 (1 : 60)
第21図 第21号住居址 (1 : 60)	第22図 第22号住居址 (1 : 80)
第23図 第24号住居址 (1 : 80)	第24図 第25号住居址 (1 : 60)
第25図 第26号住居址 (1 : 80)	第26図 第27号住居址 (1 : 80)
第27図 第28号住居址 (1 : 80)	第28図 第29号住居址 (1 : 60)
第29図 第30号住居址 (1 : 60)	第30図 第31号住居址 (1 : 60)
第31図 第32号住居址 (1 : 80)	第32図 第33号住居址 (1 : 80)
第33図 第34号住居址 (1 : 80)	第34図 第35号住居址 (1 : 80)
第35図 第36号住居址 (1 : 60)	第36図 第37号住居址 (1 : 80)
第37図 第38号住居址 (1 : 80)	第38図 第39号住居址 (1 : 80)
第39図 第40号住居址 (1 : 60)	第40図 第41号住居址 (1 : 80)

第41図 第42号住居址（1：80）	第42図 第43号住居址（1：80）
第43図 第44号住居址（1：80）	第44図 第45号住居址（1：60）
第45図 第46号住居址（1：80）	第46図 第47号住居址（1：80）
第47図 第48号住居址（1：80）	第48図 第49号住居址（1：80）
第49図 第50号住居址（1：80）	第50図 第51号住居址（1：60）
第51図 土器実測図（1：4）	第52図 土器実測図（1：4）
第53図 土器実測図（1：4）	第54図 土器実測図（1：4）
第55図 土器実測図（1：4, 1：2）	第56図 石器実測図（1：3）
第57図 石器・土製品実測図（1：3）	第58図 土偶実測図（1：2）
第59図 土偶実測図（1：2）	

図 版 目 次

P 1 遺跡航空写真（ラジコン飛行機）	P 2 ラジコン飛行機による航空写真撮影
P 3 航空写真撮影風景	P 4 遺跡南全景
P 5 第1号住居址	P 6 第2号住居址
P 7 第3号住居址	P 8 第4号住居址
P 9 第4号住居址	P 10 第5号住居址
P 11 第8号住居址	P 12 第18号住居址
P 13 第24号住居址	P 14 第25号住居址
P 15 第28, 29号住居址	P 16 第30号住居址
P 17 第31号住居址	P 18 第26号住居址
P 19 第33号住居址	P 20 第34号住居址
P 21 第37号住居址	P 22 第35号住居址
P 23 第38号住居址	P 24 第39号住居址
P 25 第40号住居址	P 26 第41号住居址
P 27 第42号住居址	P 28 第43号住居址
P 29 第44号住居址	P 30 第47号住居址
P 31 第50号住居址	P 32 炉
P 33 炉	P 34 炉
P 35 炉	P 36 炉
P 37 土城	P 38 土器出土状況
P 39 土器出土状況	P 40 土器出土状況
P 41 土器出土状況	P 42 土器出土状況
P 43 土器出土状況	P 44 出土土器
P 45 出土土器	P 46 出土土器
P 47 出土土器	



P1 遺跡航空写真(ラジコン飛行機)



P 2 ラジコン飛行機による航空写真撮影



P 3 航空写真撮影風景

第Ⅰ章 遺跡の概観

第1節 位 置

高尾第1遺跡は、長野県上伊那郡飯島町大字飯島1の55番地に所在する。

遺跡は、中央アルプス山麓の台地上に位置する。遺跡に至るには、国鉄飯田線飯島駅で下車し、北西へ約3kmほど歩いたところである。遺跡の中心で標高745mをはかる。

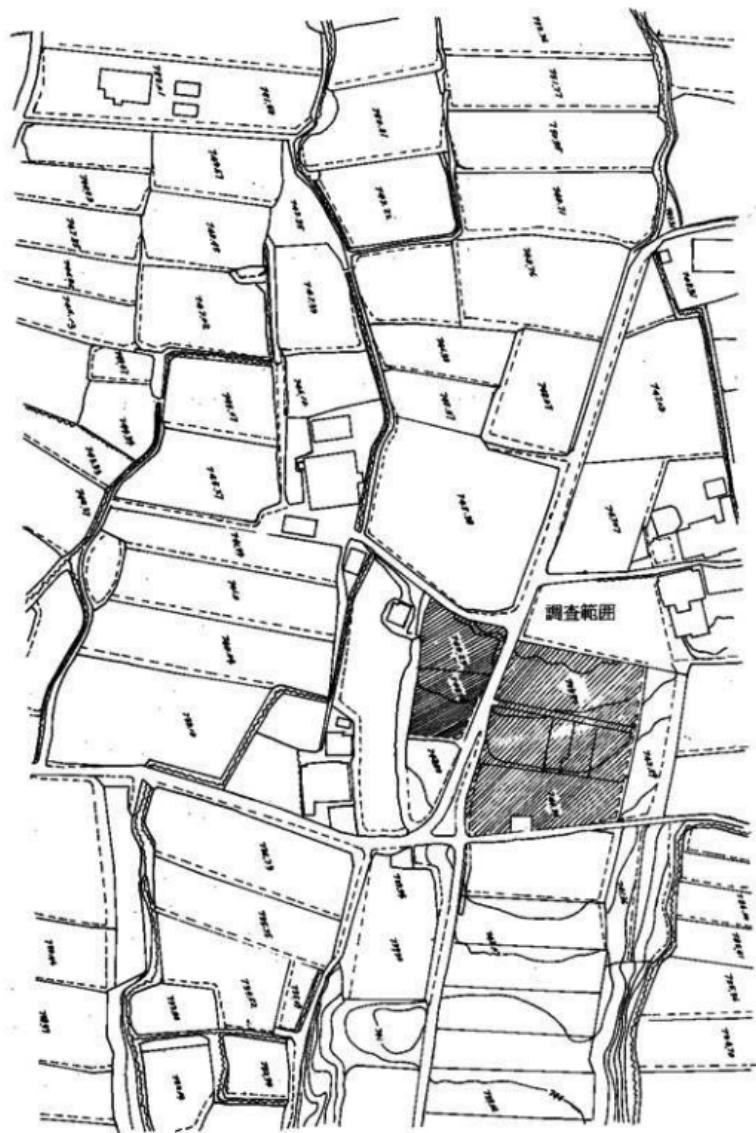
第2節 地形・地質

当遺跡は、中央アルプス南駒ヶ岳山麓の台地に位置する。遺跡は、中田切川により形成された扇状地の扇頂部にあり、南・北側の沢により、舌状の台地となっている。

調査地区的土層については、水田、桑園、畑地で擾乱されており、礫層の基盤の上にローム層、黒褐色土層、耕作土層が堆積していたものと思われる。



第1図 位置図 (1 : 100,000)



第2図 地形図 (1 : 2000)

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまで

県営は場整備事業飯島地区第26工区にある高尾第1遺跡の埋蔵文化財緊急発掘調査を飯島町では、飯島町遺跡調査会に委託し実施した。

〔飯島町遺跡調査会〕

会長	熊崎安二	(教育長)
理事	片桐修	(飯島町文化財調査委員)
	宮下静男	(")
	北原健三	(")
	桃沢匡行	(")
	松崎研定	(")
	中島淑雄	(")
	片桐佳彦	(")
	小林嘉男	(")
監事	池上勇	(飯島町監査委員)
	中野武司	(")
幹事	吉沢内次	(飯島町教育委員会教育次長)
	米沢長実	(" 係長)
	伊藤修	(" 主事)
	宮下淑江	(" 主事)

〔発掘調査団〕

团长	友野良一	(日本考古学协会会员)
調査員	伊藤修	(飯島町教育委員会主事)
"	和田武夫	(長野県考古学会員)
調査補助員	中村正純	(飯島町)

第2節 調査日誌

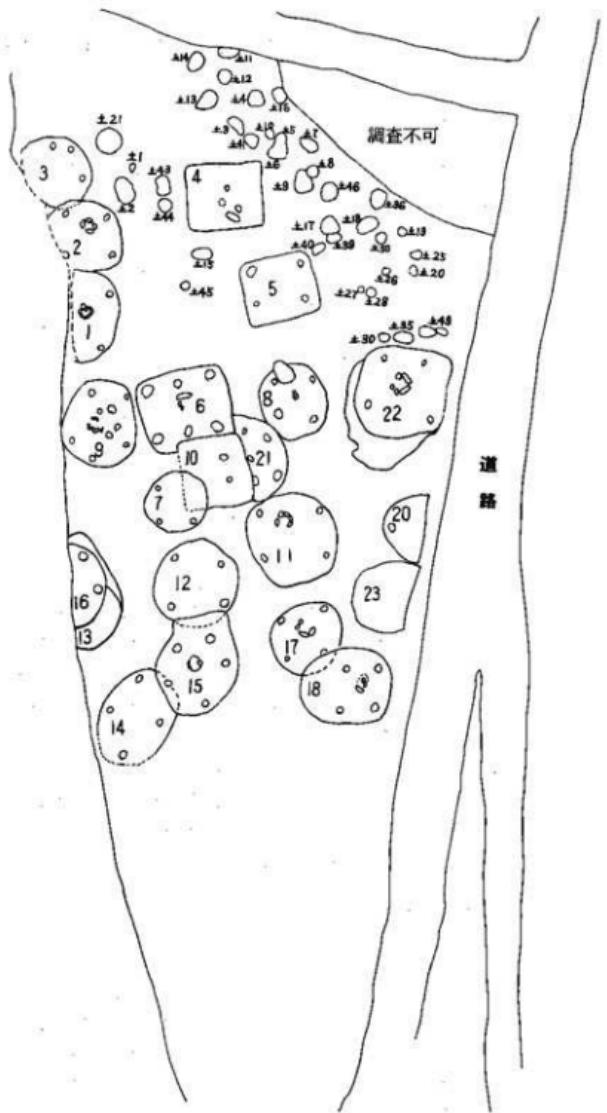
高尾第1遺跡の調査における主だった項目を拾ってみた。

○調査は、昭和55年4月24日より着手し、昭和56年3月20日に完了した。

○調査は、調査地区全体に2m四方のグリットを設定し行なった。

○遺物について、主要なものは平面図に出土点、出土高等を記録した。

○遺構については、平面図の他にできる限り遺構断面の土層も記録を行なった。



第3図 造構配置

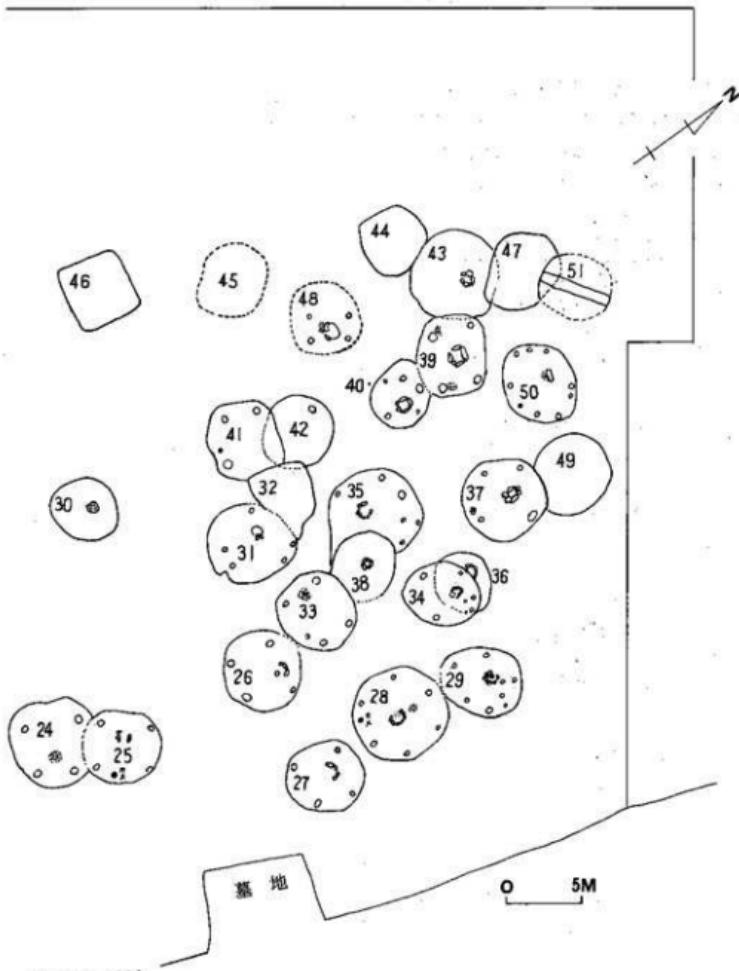


図 (1 : 400)

第Ⅲ章 遺構

台地の中央部に調査区域を設定し、南北90m、東西70mの全面発掘を行なった。その結果、縄文時代中期の住居址45軒、弥生時代の住居址4軒、土塙49箇所を検出した。

住居址は台地上に約30~40mの幅で直線または大きな弧をえがく形でみられ、住居址の内側は土塙群あるいは空間地となっているように思われる。

項目	住居址	1号	2号	3号	4号	5号
位 置	A地区 調査地区西	A地区 調査地区西	A地区 調査地区西	A地区 調査地区西	A地区 調査地区西	A地区 調査地区西
ブ ラ ン	楕円形	円形	円形	方形	方形	方形
壁 高	南25cm北25cm 東25cm西ナシ	南ナシ北30cm 東35cm西35cm	南20cm北25cm 東25cm西20cm	南10cm北10cm 東15cm西	南10cm北10cm 東10cm西10cm	
壁の状態	悪い	良	好	良	好	大部分が破壊 上半分が破壊
床	平坦であるが 軟弱である	平坦である	平坦である	平坦でかたい	平坦でかたい	
周 溝	東側壁外に3mにわたり巾5cm~15cmの 溝がみられる					
主柱穴	柱穴2個 $P_1 \sim P_2$	柱穴4個 $P_1 \sim P_4$	柱穴4個 $P_1 \sim P_3 \sim P_4$	柱穴4個 $P_1 \sim P_3$	柱穴4個 $P_1 \sim P_4$	
炉	位 置	中 央	中 央	確認できない	中 央 北 側	確認できない
	形 式	石 囲 炉	石 囲 炉		埋 窯 炉	
	規 模	110cm×75cm	115cm×110cm		120cm×100cm	
壁外施設 その他	西南部が約1/3 崖により削り取られている	西南部の一部 が崖により削り取られている	南側の一部が 崖により削り取られている			
遺物 出土状況	曾利Ⅲ	曾利Ⅰ~Ⅱ	井戸尻Ⅱ 曾利Ⅰ~Ⅱ	弥生後期	弥生後期	

住居址一覧表(2)

項目	住居址	6号	7号	8号	9号	10号
位 置	A地区 調査地区中央	A地区 調査地区中央	A地区 調査地区中央	A地区 調査地区中央	A地区 調査地区中央	A地区 調査地区中央
ブ ラ ン	方 形	円 形	円 形	円 形	円 形	方 形
壁 高	南10cm北10cm 東20cm西15cm	南10cm北 東10cm西10cm	南15cm北10cm 東10cm西15cm	南20cm北30cm 東30cm西35cm	南25cm北20cm 東30cm西25cm	
壁の状態	良 好	良 好	良 好	良 好	良 好	良 好
床	平坦でかたい	平坦でかたい	平坦でかたい	平坦でかたい	平坦でかたい	平坦でかたい
周 溝						
主 柱 穴	柱穴6個 P ₁ ・P ₂ P ₅ ・P ₆	柱穴3個 P ₁ ～P ₃	柱穴4個 P ₁ ～P ₄	柱穴10個 P ₂ ・P ₅ P ₈ ・P ₁₀	柱穴2個 P ₁ ・P ₂	
位 置	中 央	中 央	中 央	中 央	中 央	中央西側
炉 形 式	石 圈 炉	石 圈 炉	石 圈 炉	石 圈 炉	石 圈 炉	埋 蔡 炉
規 模	120cm×120cm	105cm×100cm	160cm×140cm	100cm×80cm		
壁外施設 その他の		10住居址によ り一部破壊		住居址内にビ ットが多い	7号住居址を 切っている	
遺 物 出 土 状 況	曾 利 II		曾 利 II	曾 利 II	弥 生 後 期	

住居址一覧表(3)

項目	住居址	11号	12号	13号	14号	15号
位 置	A地区 調査地区東	A地区 調査地区東	A地区 調査地区東南	A地区 調査地区東南	A地区 調査地区東	
ブ ラ ン	円 形	円 形	楕 圓 形	円 形	南, 西にかく ばった楕圓形	
壁 高	南65cm北20cm 東30cm西25cm	南 北 東 西	南 北50cm 東25cm西10cm	南 北25cm 東20cm西15cm	南35cm北45cm 東10cm西30cm	
壁の状態	良 好	良 好	良 好	良 好	良 好	
床	平坦であるが 軟弱である	平坦でかたい	不 明	平坦であるが 軟弱である	平坦でかたい	
周 溝						
主柱穴	柱穴4個 P ₁ ～P ₄	柱穴 個	不 明	柱穴4個 P ₁ ～P ₄	柱穴5個 P ₁ ～P ₅	
炉	位 置	西 側		確認できない		中 央
	形 式	石 團 炉				石 團 炉
	規 模	110cm×80cm				115cm×90cm
壁外施設 その他			16号住により 破壊	北側一部が15 住に切られて いる	西側が一部14 号住居址を切 っている	
遺 物 山 土 状 況	曾 利 II		曾 利 II	遺物の出土が 多い 平出3A・井戸 尻II・曾利II	曾 利 II	

住居址一覧表(4)

項目	住居址	16号	17号	18号	19号	20号
位 置	A地区 調査地区東南	A地区 調査地区東	A地区 調査地区東			A地区 調査地区東
ブ ラ ン	楕円形	円形	楕円形			円形
壁 高	南北10cm 東25cm西20cm	南25cm北15cm 東25cm西15cm	南5cm北15cm 東10cm西10cm	㊂		南15cm北 東西15cm
壁の状態	良 好	良 好	わずかに壁が 残っている			良 好
床	平坦で軟弱で ある	南西へやや傾 斜がみられる	平坦で軟弱で ある			平坦で軟弱で ある
周 溝						
主柱穴	柱穴2個 P ₁ ・P ₂	柱穴4個 P ₁ ～P ₄	柱穴4個 P ₁ ～P ₄	㊂		柱穴1個 P ₁
位 置	不 明	中 央	中 央 (やゝ北寄り)			
炉 形 式		石 囲 炉	石 囲 炉			
規 模		120cm×110cm	85cm×80cm			
壁外施設 そ の 他	13号住を切って いる。南側半分 は崖により削り とられている			西側一部が17 号を切ってい る		住居址半分は 道路により削 り取られてい る
遺 物 出土状況	曾 利 II	曾 利 II				

住居址一覧表(5)

項目	住居址	21号	22号	23号	24号	25号
位 置	A地区 調査地区中央	A地区 調査地区中央 東			B地区 調査地区西南	B地区 調査地区西南
ブ ラ ン	円 形	長 方 形			円 形	円 形
壁 高	南 北10cm 東10cm西15cm	南10cm北25cm 東20cm西20cm		㊂	南15cm北15cm 東20cm西25cm	南20cm北35cm 東50cm西15cm
壁の状態	上部は破壊さ れている	悪 い			良 好	良 好
床	平坦でかたい	軟弱である			平坦でかたい	平坦でかたい
周 溝						
主 柱 穴	柱穴4個 P ₁ ～P ₄	柱穴4個 P ₁ ～P ₄		㊂	柱穴4個 P ₁ ～P ₄	柱穴4個 P ₁ ～P ₄
炉	位 置	中 央	中 央		不 明 (中央?)	中 央
	形 式	半分切取られ ていて確認でき きず	石 囲 炉			石 囲 炉
	規 模	半分切り取ら れていて不明	130cm×100cm			150cm×85cm
壁外施設 その他	南西部半分が 10及び6号住 居址により切 取られている				柱穴の他に深 い落込が東側 にある	24号住居址に 一部重なって いる
遺 物 出土状況	曾 利 II				曾利 I～III	東の土塙より 埋甕出土 曾 利 II

住居址一覧表(6)

項目	住居址	26号	27号	28号	29号	30号
位 置	B地区 調査地区東	B地区 調査地区東	B地区 調査地区東	B地区 調査地区東	B地区 調査地区東	B地区 調査地区東
ブ ラ ン	円 形	円 形	円 形	円 形	円 形	円 形
壁 高	南20cm北5cm 東5cm西5cm	南10cm北15cm 東15cm西20cm	南35cm北30cm 東30cm西35cm	南40cm北35cm 東40cm西45cm	南5cm北15cm 東15cm西25cm	
壁の状態	大部分が破壊 良 好	上部が破壊 良 好		良 好	良 好	良 好
床	平坦でかたい	平坦である	平坦でかたい	平坦でかたい	平坦でかたい	平坦でかたい
周 溝			壁にそって巾10cm~30cm深さ5cm~15cmの周溝あり			壁にそって巾5cm~10cm深さ5cm~10cmの周溝あり
主柱穴	柱穴4個 P ₁ ~P ₄	柱穴4個 P ₁ ~P ₄	柱穴6個 P ₁ ~P ₆	柱穴9個 P ₁ ~P ₂ P ₄ ~P ₅	柱穴4個 P ₁ ~P ₄	
炉	位 置	中央北寄り	中 央	中 央	中 央	中 央
	形 式	石囲炉	石囲炉	石囲炉	石囲炉	石囲炉
	規 模	105cm×70cm	75cm×70cm	160cm×140cm	90cm×85cm	80cm×75cm
壁外施設 その他の						
遺 物 出土状況	曾利II	井戸尻II 曾利I~III	埋甕出土 曾利II	炉内に埋甕出土 井戸尻III 曾利I~III		曾利II

住居址一覧表(7)

項目	住居址	31号	32号	33号	34号	35号
位 置	B地区 調査地区中央	B地区 調査地区中央	B地区 調査地区東	B地区 調査地区東	B地区 調査地区中央	
ブ ラ ン	円 形	不 明	円 形	楕 圓 形	楕 圓 形	
壁 高	南30cm北 東20cm西30cm	南 cm北25cm 東20cm西 cm	南15cm北20cm 東5 cm西30cm	南10cm北15cm 東15cm西15cm	南25cm北10cm 東15cm西25cm	
壁の状態	良 好		良 好	上部は破壊さ れている	上部は破壊さ れている	
床	平坦である	平坦である	平坦であるが 軟弱である	平坦であるが 軟弱である	平坦である	
周 溝						
主 柱 穴	柱穴5個 P ₁ ・P ₂ P ₄ ・P ₅	柱穴2個 P ₁ , P ₂	柱穴5個 P ₁ ・P ₃ P ₄ , P ₅	柱穴7個 P ₁ ～P ₃ P ₆ ・P ₇	柱穴6個 P ₁ ～P ₅	
位 置	中 央 やや北側		中 央	中 央	ほば 中央	
炉 形 式	石囲炉		石囲炉	石囲炉	石囲炉	
規 模	160cm×140cm		80cm×70cm	55cm×55cm	85cm×80cm	
壁外施設 そ の 他	32号住居址と 接触している	31号, 41号, 42号住居址に 接触している				南にたれさがっ ている部分が38 号住居址に切り 取られている
遺 物 出 土 状 況		埋甕出土		曾利II		井戸尻II

住居址一覧表(8)

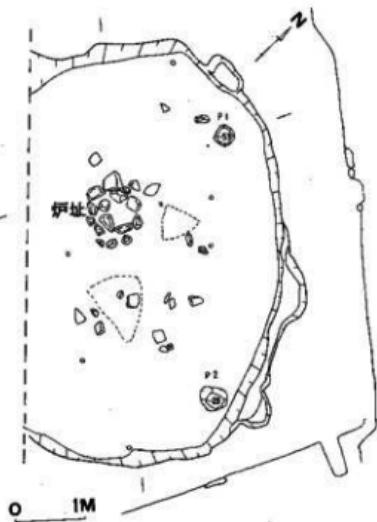
項目	住居址 36号	37号	38号	39号	40号
位 置	B地区 調査地区東	B地区 調査地区北東	B地区 調査地区中央	B地区 調査地区北西	B地区 調査地区中央
ブ ラ ン	円 形	円 形	楕 圓 形	方 形	楕 圓 形
壁 高	南 北5cm 東5cm西15cm	南25cm北10cm 東15cm西10cm	南 北5cm 東 西10cm	南10cm北10cm 東15cm西40cm	南40cm北20cm 東20cm西20cm
壁の状態	悪 い	良 好	北側、西側に 残っている	良 好	良 好
床	平坦であるが 軟弱である	軟弱である	平坦でかたい	平坦でかたい	平坦でかたい
周 溝					
主柱穴	柱穴 個 不 明	柱穴 4 個 $P_1 \sim P_4$	柱穴 6 個 $P_2 \cdot P_3 \cdot P_5$	柱穴 4 個 $P_1 \sim P_4$	柱穴 5 個 $P_1 \cdot P_3 \sim P_5$
位 置	中央よりやゝ 西北寄り	中 央	中 央	中 央	中 央
炉 形 式	石 囲 炉	石 囲 炉	石 囲 炉	石 囲 炉	石 囲 炉
規 模	70cm×70cm	120cm×120cm	60cm×50cm	120cm×100cm	85cm×80cm
壁外施設 その他	34号住居址の 一部に貼床		東南部が33号 住居址に切り 取られている		住居址内に土 塙が9個ある
遺 物 出 土 状 況	曾利I～II	炉内1個及び 東側寄りに2 個の埋甕出土 曾利II	平出3A 井戸尻II	南側より埋甕 出土 曾利III	炉内より土器 出土 曾利II

住居址一覧表(9)

項目	住居址	41号	42号	43号	44号	45号
位 置	B地区 調査地区中央	B地区 調査地区中央	B地区 調査地区北西	B地区 調査地区西	B地区 調査地区西	
ブ ラ ン	円 形	円 形	円 形	円 形	円 形	
壁 高	南45cm北20cm 東 西40cm	南 北20cm 東20cm西	南20cm北 東 西10cm	南55cm北40cm 東20cm西40cm	南15cm北20cm 東 西	
壁の状態	良 好	良 好	良 好	良 好	不 明	
床	平坦でかたい	平坦でかたい	平坦でかたい	平坦でかたい		
周 溝				巾5cm~20cm 深さ5~10cm 南東部50cmをのぞき全体にあり		
主 柱 穴	柱穴4個 P ₁ ~P ₄	柱穴1個 P ₁	柱穴12個 P ₁ ~P ₂ P ₁₁	柱穴4個 P ₁ ~P ₄	柱穴 個	
位 置	中 央	不 明	中 央	中 央	不 明	
炉 形 式	石囲炉であつたと思われる		石 囲 炉	石 囲 炉		
規 模	165cm×150cm		95cm×80cm	150cm×135cm		
壁外施設 その他	42号住居址に 東側が接觸して いる。南側が 32号に接触	南側が41号東 側が32号に接 触	住居内に土塙 が多く出た			
遺 物 出 土 状 況	曾 利 II	曾 利 II	曾 利 II	南側壁寄りよ り埋甕出土 曾 利 II	曾 利 II	

住居址一覧表 00

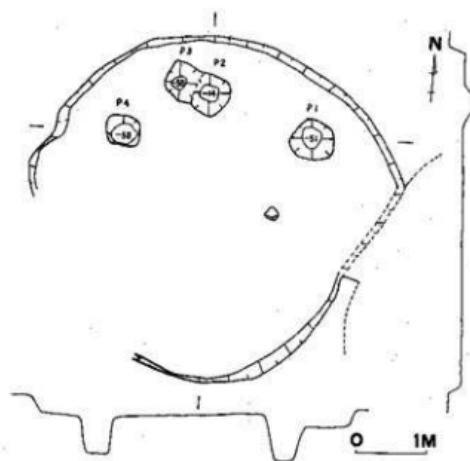
項目	住居址	46号	47号	48号	49号	50号
位 置	B地区 調査地区西	B地区 調査地区北	B地区 調査地区西	B地区 調査地区北	B地区 調査地区北	
ブ ラ ン	方 形	円 形	円 形	円 形	円 形	
壁 高	南50cm北60cm 東65cm西65cm	南 北35cm 東25cm西40cm	南 北25cm 東25cm西20cm	南10cm北10cm 東10cm西15cm	南20cm北30cm 東25cm西35cm	
壁の状態	良 好	良 好	不 明	上部は破壊さ れている	良 好	
床	平坦でかたい	平坦でかたい	平坦であるが 軟弱	平坦でかたい	平坦でかたい	
周 溝						
主柱穴	柱穴 12個 $P_1 \sim P_3$ P_{11}	柱穴 2個 $P_1 \sim P_2$	柱穴 4個 $P_1 \sim P_4$	柱穴 5個 $P_1 \sim P_5$	柱穴 8個 $P_1 \sim P_8$	
位 置	中央 南	ほゞ中央	中 央	中央よりやゝ 西 寄り	中 央	
炉 形 式	埋 灼 炉	石囲炉であつ たと思われる	石 围 炉		石 围 炉	
規 模	70cm×75cm	135cm×130cm	115cm×105cm	105cm×95cm	145cm×140cm	
壁外施設 そ の 他						
遺 物 出 土 状 況	弥生後期	西南の土塙よ り埋葬出土 曾利 II	曾 利 II	曾 利 II	南側壁寄りよ り埋葬出土 曾利 II	



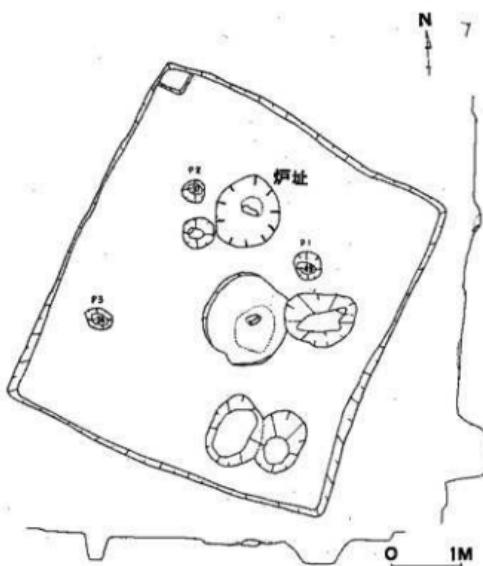
第4図 第1号住居址 (1 : 80)



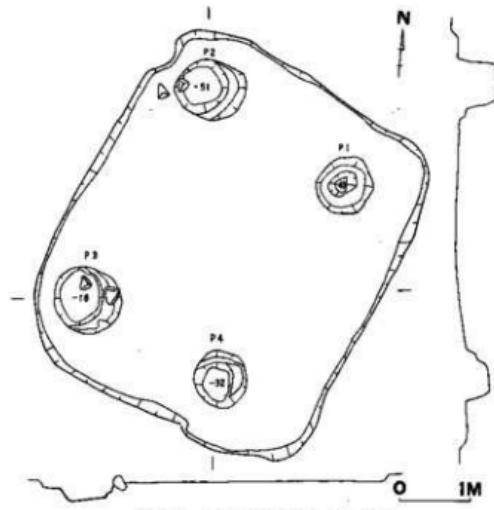
第5図 第2号住居址 (1 : 80)



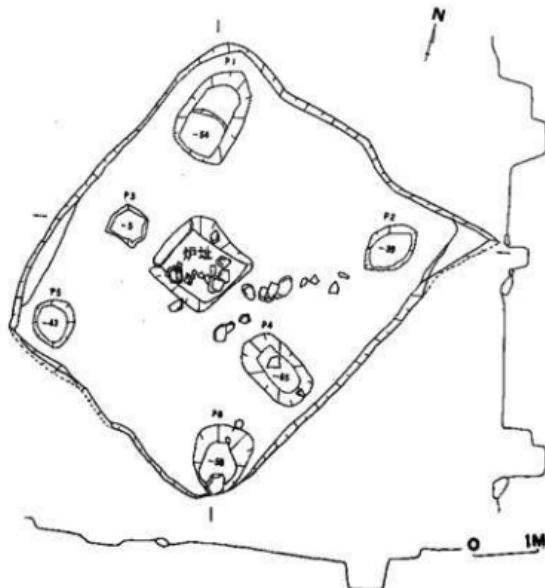
第6図 第3号住居址 (1 : 80)



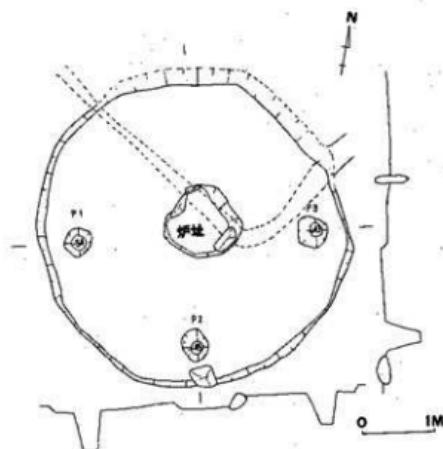
第7図 第4号住居址 (1 : 80)



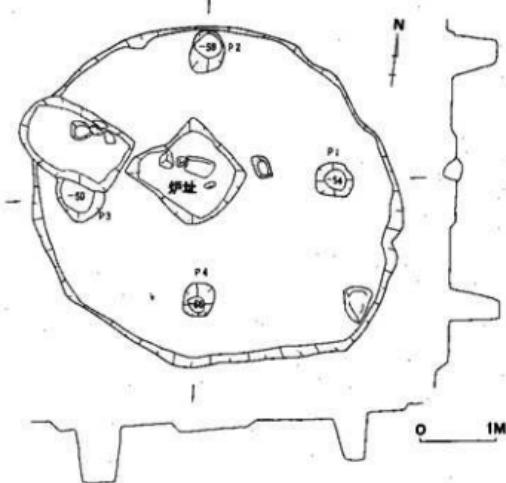
第8図 第5号住居址 (1 : 80)



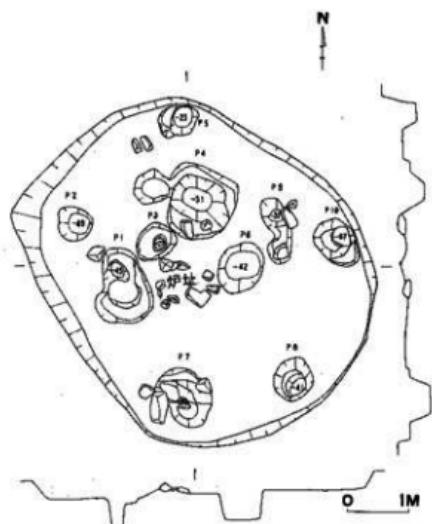
第9図 第6号住居址 (1 : 80)



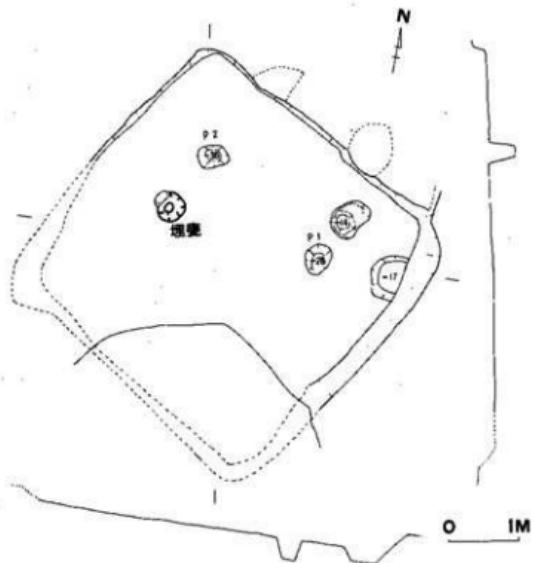
第10図 第7号住居址 (1 : 60)



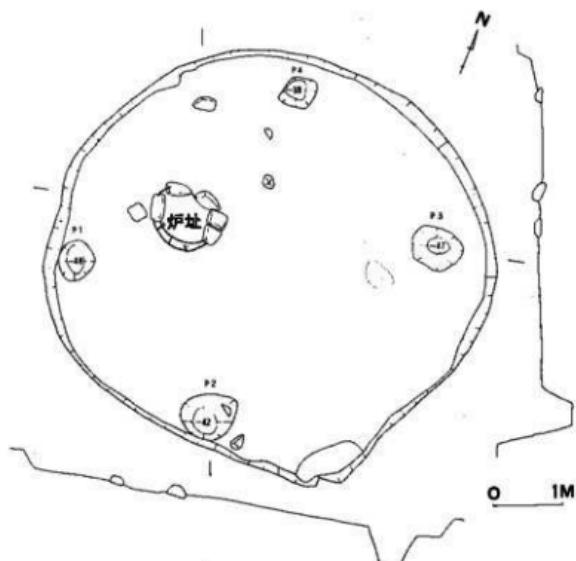
第11図 第8号住居址 (1 : 60)



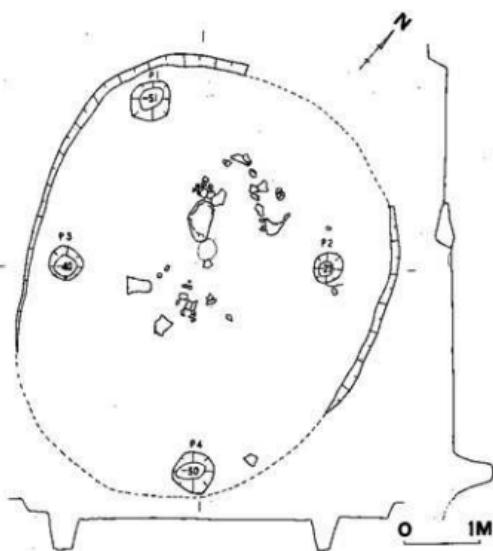
第12図 第9号住居址 (1:80)



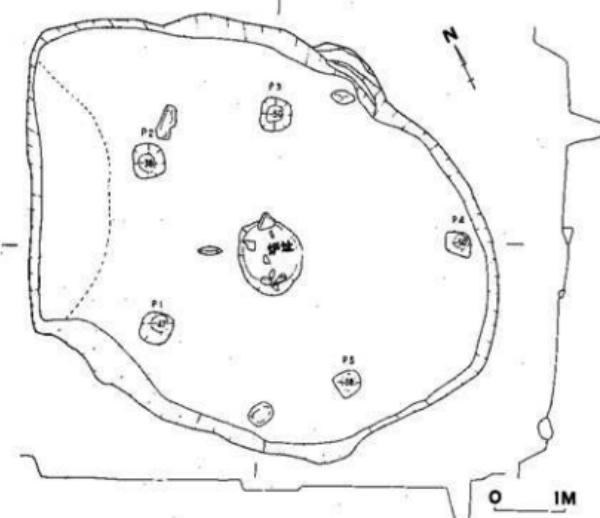
第13図 第10号住居址 (1:80)



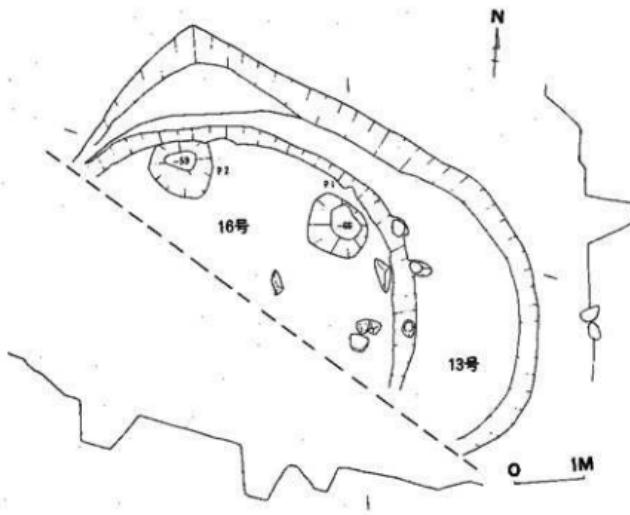
第14図 第11号住居址 (1 : 80)



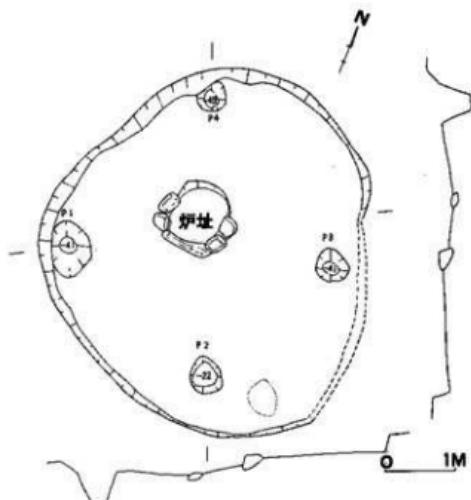
第15図 第14号住居址 (1 : 80)



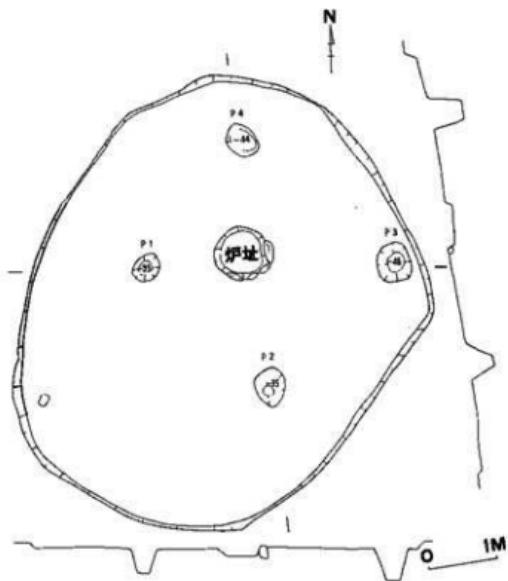
第16図 第15号住居址 (1 : 80)



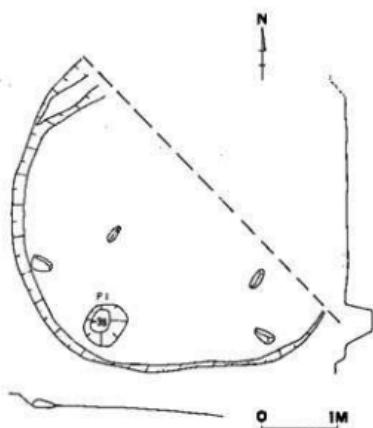
第17図 第13号、第16号住居址 (1 : 80)



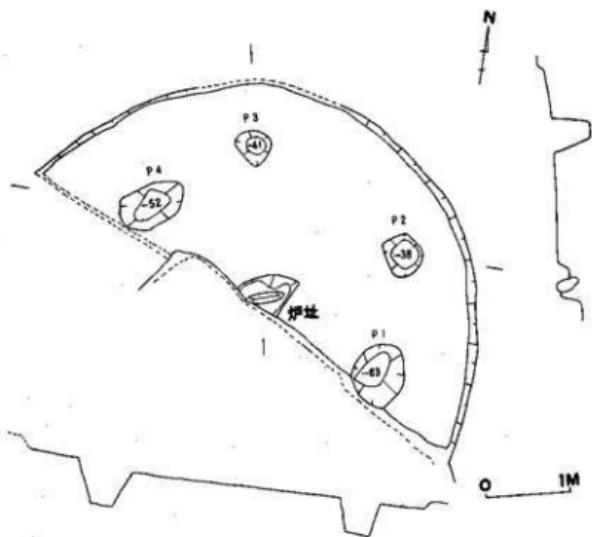
第18図 第17号住居址 (1 : 80)



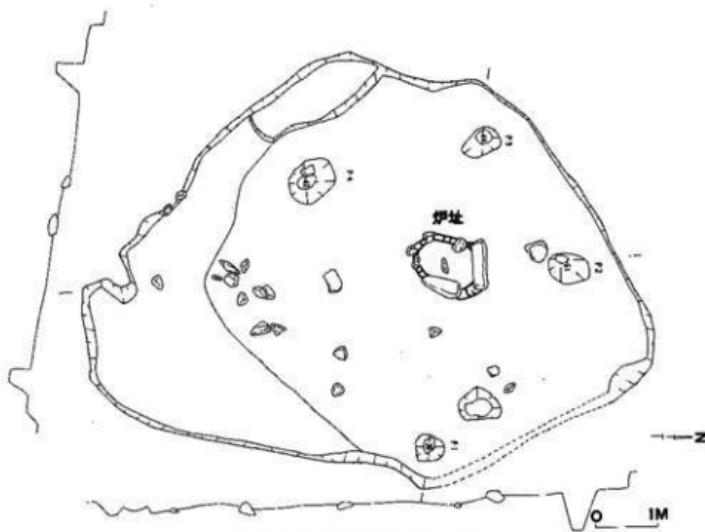
第19図 第18号住居址 (1 : 80)



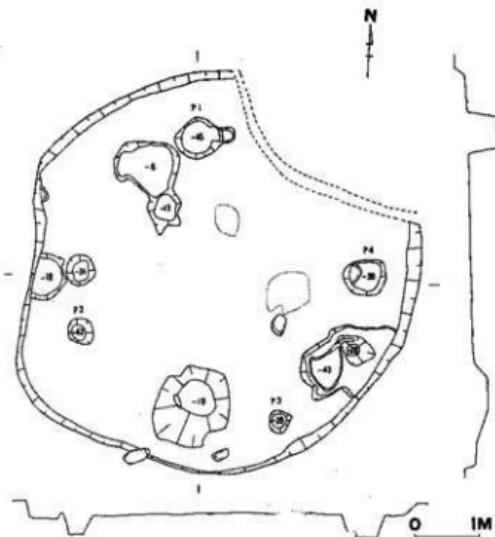
第20図 第20号住居址 (1 : 60)



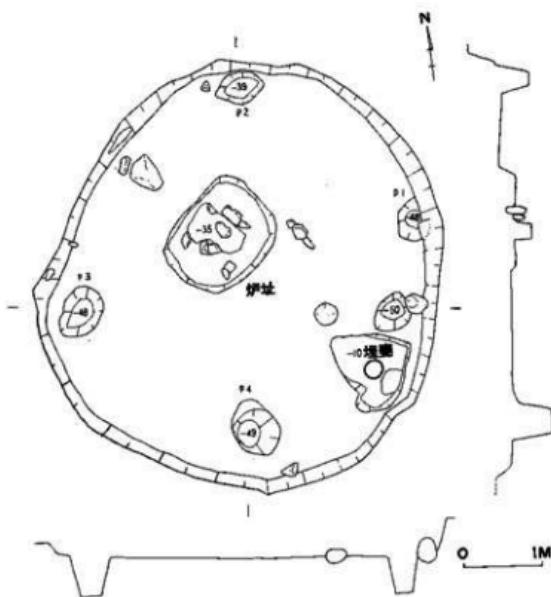
第21図 第21号住居址 (1 : 60)



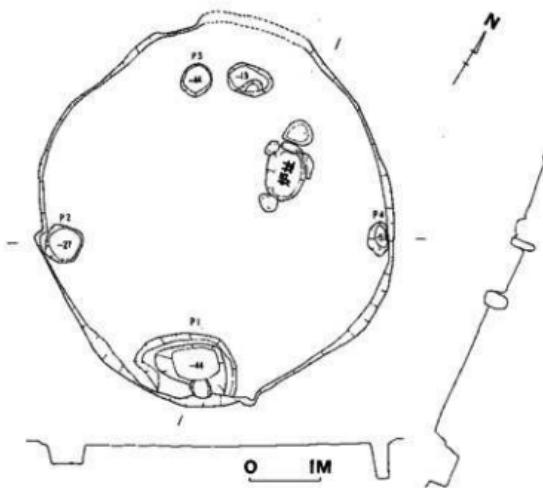
第22図 第22号住居址 (1 : 80)



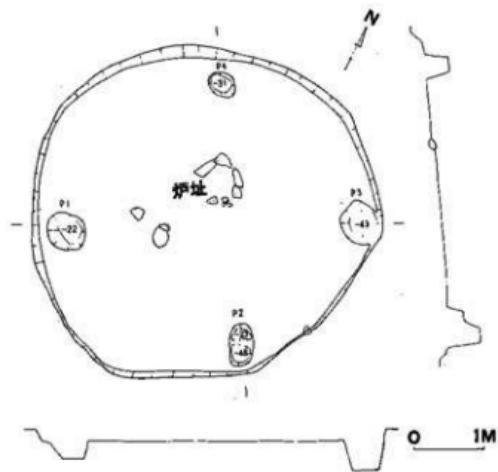
第23図 第24号住居址 (1 : 80)



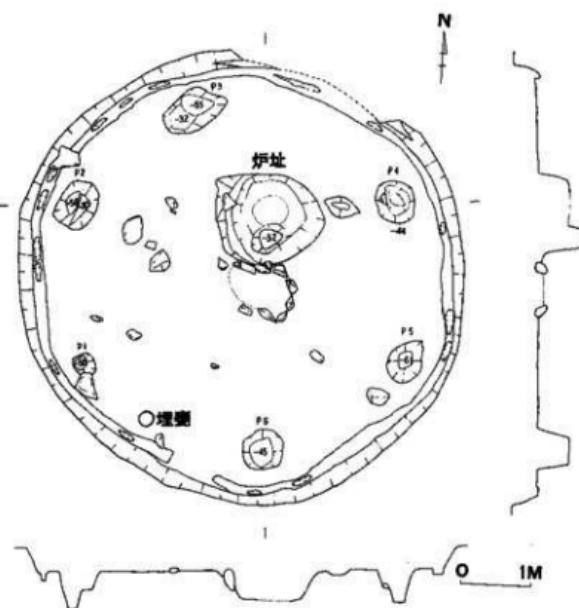
第24図 第25号住居址 (1 : 60)



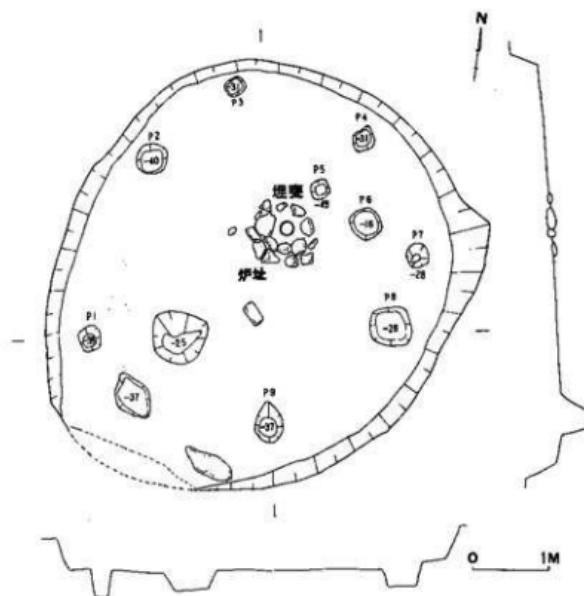
第25図 第26号住居址 (1 : 80)



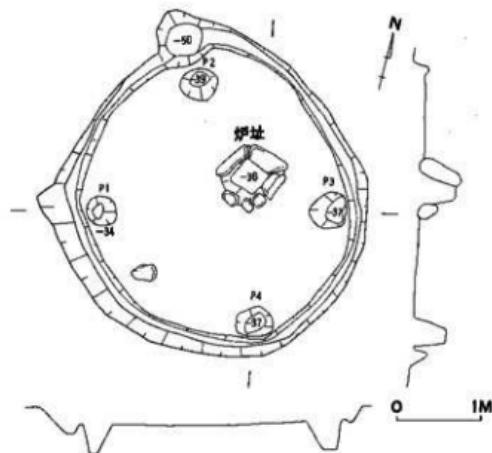
第26図 第27号住居址 (1 : 80)



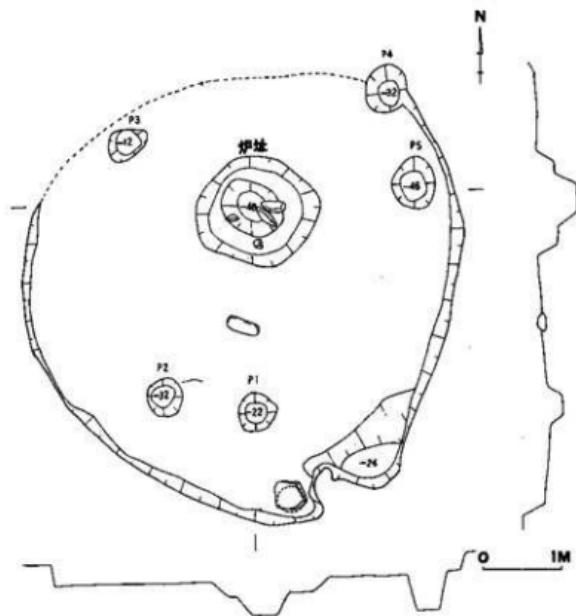
第27図 第28号住居址 (1 : 80)



第28図 第29号住居址 (1 : 60)



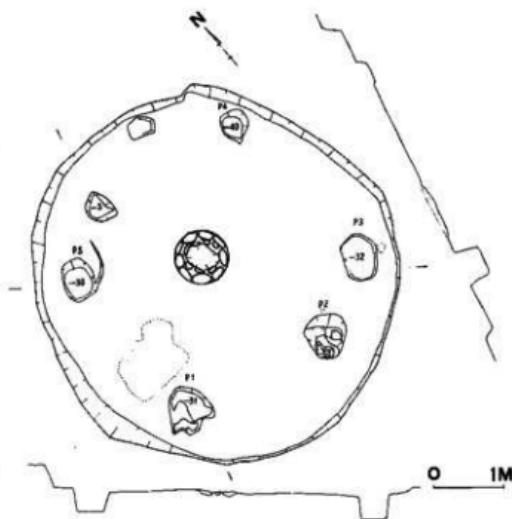
第29図 第30号住居址 (1 : 60)



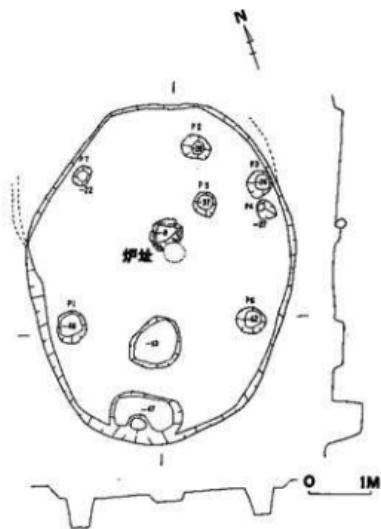
第30図 第31号住居址 (1 : 60)



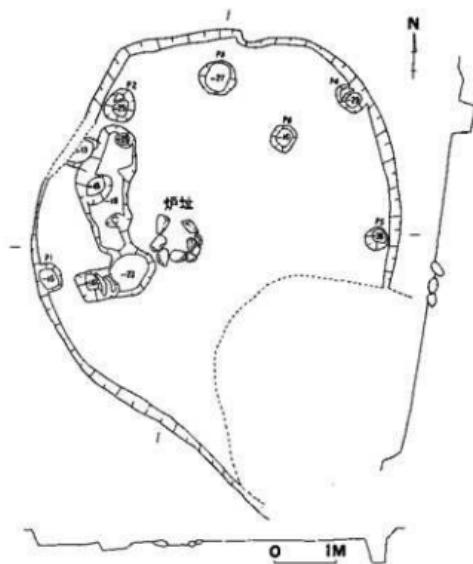
第31図 第32号住居址 (1 : 80)



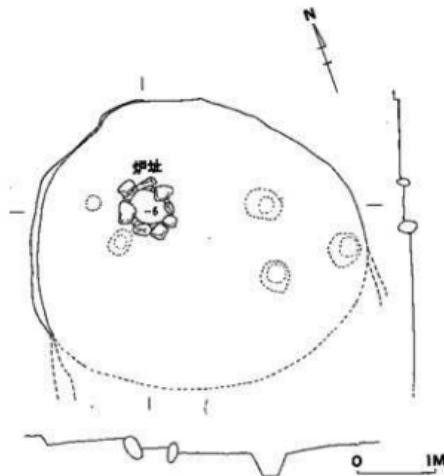
第32図 第33号住居址 (1 : 80)



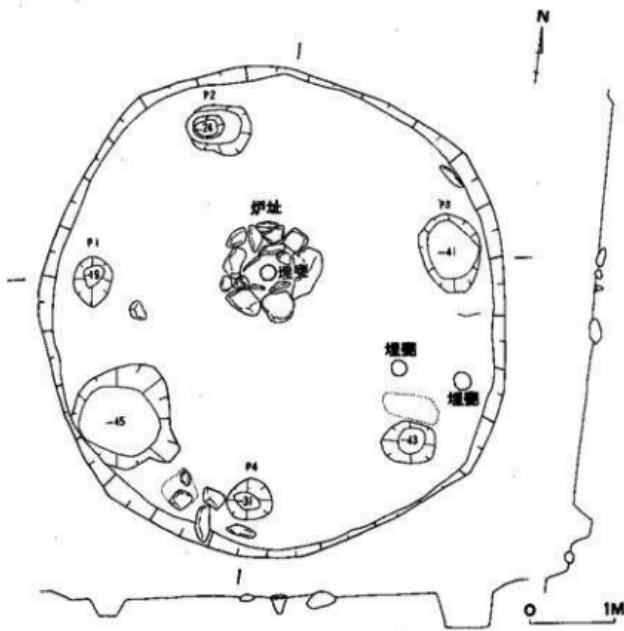
第33図 第34号住居址 (1 : 80)



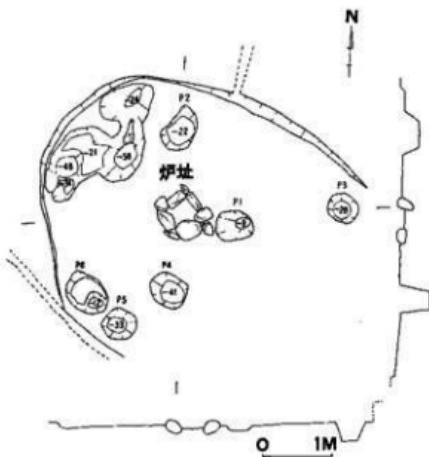
第34図 第35号住居址 (1 : 80)



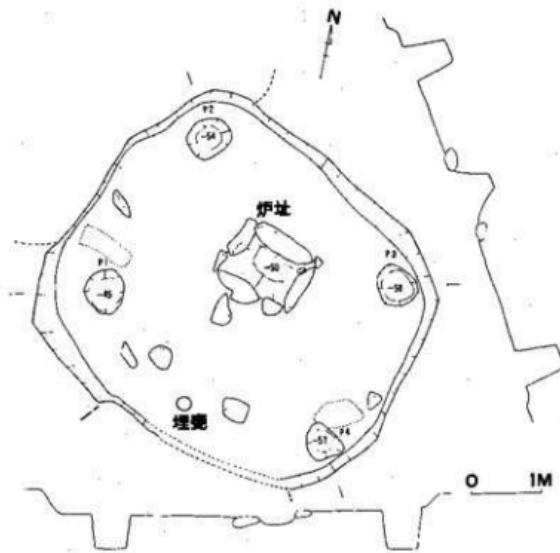
第35図 第36号住居址 (1 : 60)



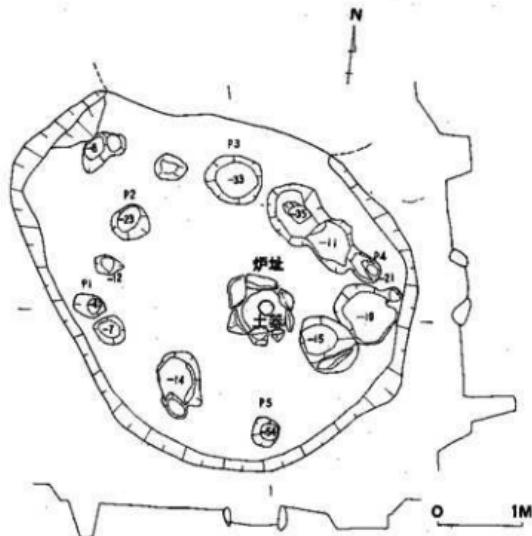
第36図 第37号住居址 (1 : 60)



第37図 第38号住居址 (1 : 80)



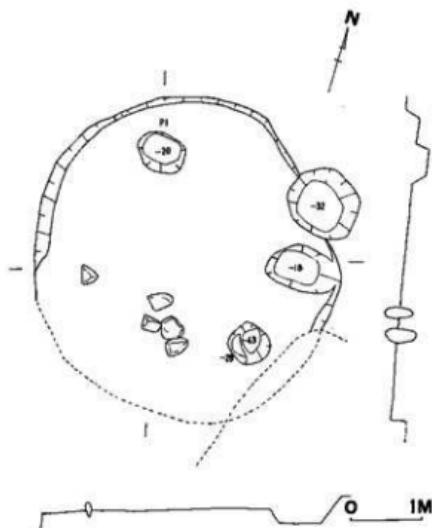
第38図 第39号住居址 (1 : 80)



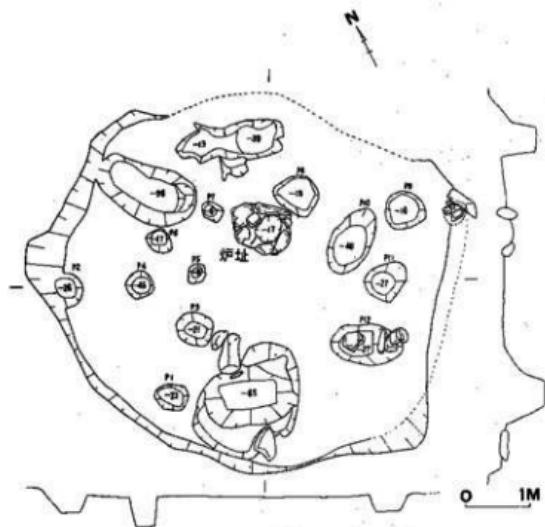
第39図 第40号住居址 (1 : 60)



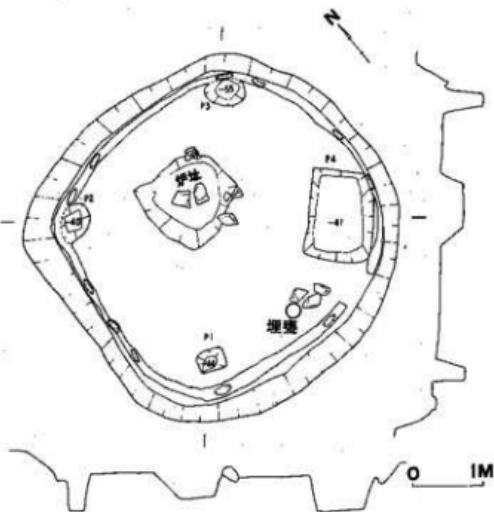
第40図 第41号住居址 (1 : 80)



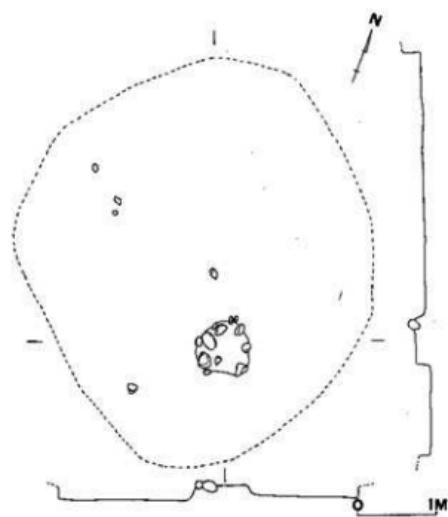
第41図 第42号住居址 (1 : 80)



第42図 第43号住居址 (1 : 80)



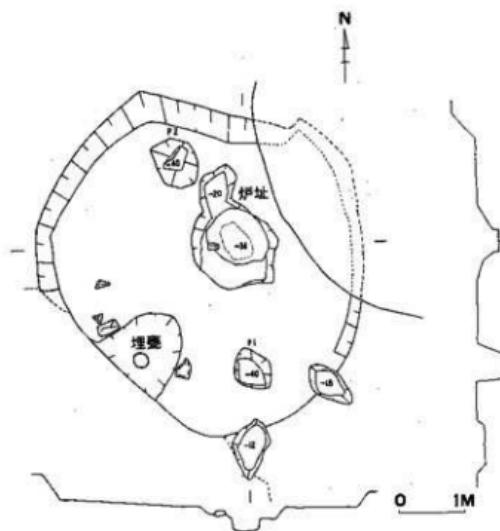
第43図 第44号住居址（1:80）



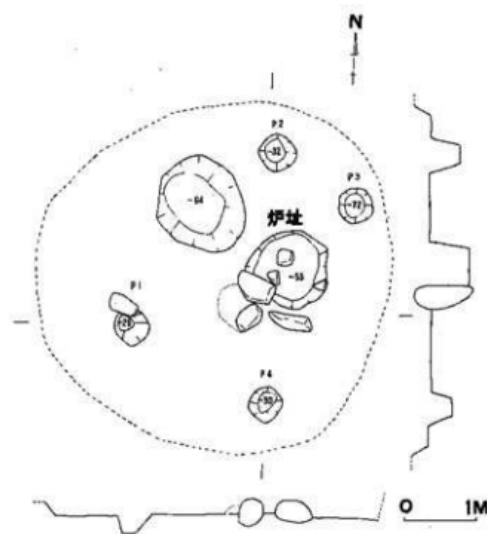
第44図 第45号住居址 (1 : 80)



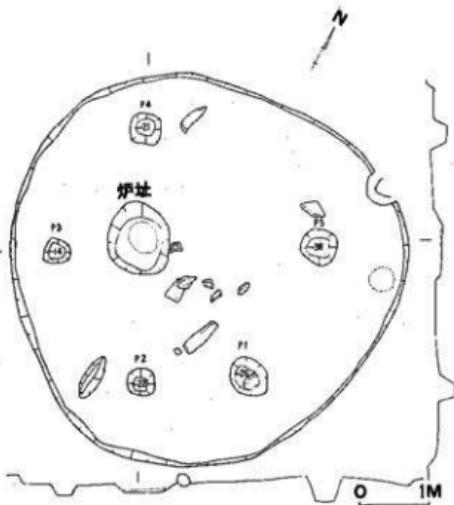
第45図 第46号住居址 (1 : 80)



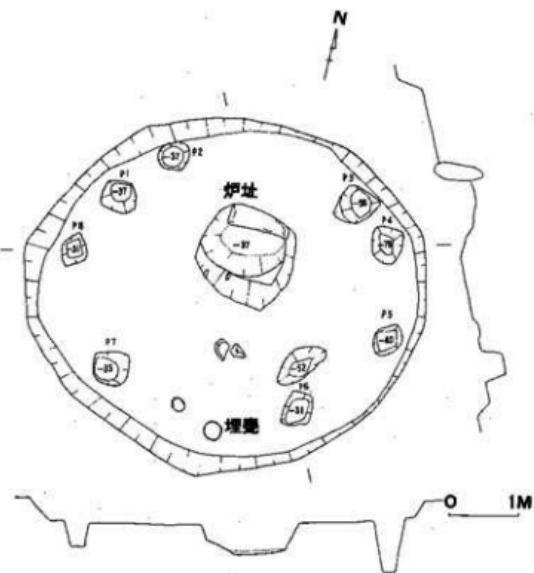
第46図 第47号住居址（1:80）



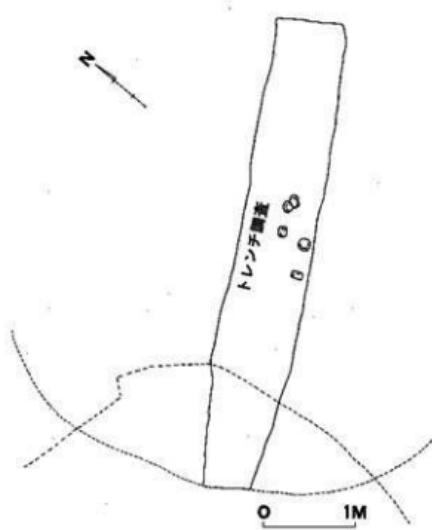
第47図 第48号住居址 (1:80)



第48図 第49号住居址 (1 : 80)



第49図 第50号住居址 (1 : 80)



第50図 第51号住居址 (1 : 80)

第IV章 遺物

1. 土器

今回の調査で多くの土器が出土した。土器は繩文中期平出3A式、井戸尻II式、曾利I～III式、弥生後期で曾利II式のものが比較的多い。出土した土器の内、主なものについてみると次のとおりである。

①は第1号住居址より出土した土器で、口縁部と底部を欠いている壺型土器である。文様は隆線による大柄な唐草文を施し、空間を構円状に区画し内部を壺状器具による平行沈線文が施され、胴部以下は太目の隆線で4区画し、その間を綾杉文でうめた唐草文系III期に比定される土器である。

②は第11号住居址出土の土器で、口縁部に2個の把手が付けられ、頸部には曲線上の入組文と縦の平行沈線文が描かれ、胴部に単節の斜繩文が施された曾利II式に比定される深鉢型土器である。

③は第25号住居址より出土した土器で、口唇は垂文帯で頸部に2個の把手が付され、構円状の区画文と、隆線による唐草文が施され、その内部を縦、横、斜に沈線文でうめ、胴部以下は、縦に隆線による8区画がなされ、その空間を綾杉文が施された曾利II式に比定される土器である。

④は第28号住居址より出土した土器で、口縁部は隆線と沈線文で4区画され、頸部以下は地文が繩文でその上に蕨手状の沈線文が施された曾利II式の新しいところに比定されると思われる伊那谷的な要素をもった土器である。

⑤は第15号住居址から出土した土器で、口縁部に隆帶による大柄な渦巻文が施され、その渦巻文と渦巻文との間を沈線でうめている。頸部から胴部にかけ、蕨手文や直線で区画し、その間を綾杉文で埋められた曾利II～III式に比定される土器である。

⑥は第16号住居址履土中より出土した深鉢型土器である。口縁部に一条の隆帶が波状にめぐり、その隆帶に壺状器具で刻目が付けられて、口唇には縦平行に押引状の連続刺突が施されている。また、胴部にも口縁部同様の隆帶横位に一条めぐらしている土器で、井戸尻II式に比定されると考えられる。

⑦は第16号住居址出土の土器で、口縁部無文帯で、頸部から胴部にかけ地文が繩文の上に太い平行沈線が縦に施された深鉢で曾利II～III式に比定される土器であろう。

⑧は第20号住居址出土土器で、片側のみに把手が付いたキャリバ形の壺型土器である。口縁部には縦の平行沈線が施され、頸部から胴部にかけて地文が繩文で縦に蛇行沈線文が施されていて、曾利II式に比定されると思われる土器である。

⑨は第37号住居址から出土した土器で、口縁部が波状をなし、頸部にエプロン状亘文が付され底部を欠いた壺型土器で、曾利I式の範ちゅうに入るものと思われる土器である。

⑩は第37号住居址出土土器で、口唇部が内湾し、口縁部には縦に粘土紐が付され、頸部に二条の隆帶をめぐらした深鉢型土器である。曾利I式に比定される土器である。

⑪は第37号住居址出土の胴部以下の壺型土器である。底部の上端に円形文が付けられている例は井戸尻式には見られない文様である。本址は曾利II式に比定される住居址と考えている。（52頁につづく）

表1 高尾第1遺跡出土石器一覧表(1)

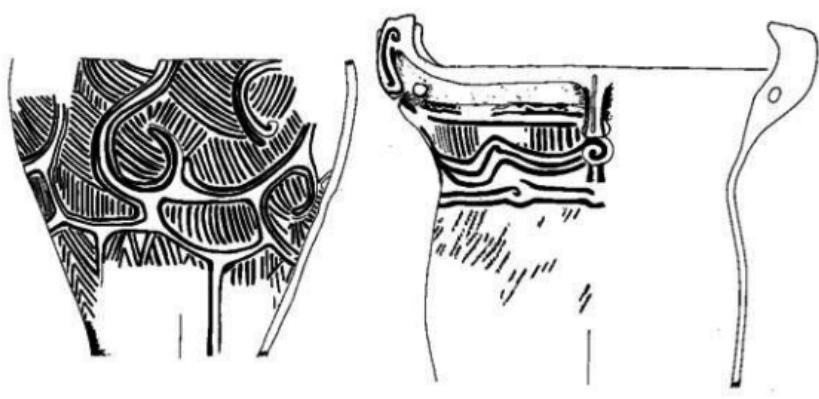
住居址 番号	打製 石斧	磨製 石斧	石匙	石鎌	石錐	磨石	横刃形 石器	石皿	凹石	スクレ ーナー	ドリル	石棒	黒曜 石片	その他
1 35	(13) 9	(1) 4	(3) 1		1	(1) 3	(2) 24	(17) 1	(1) 2				6	
2 57	(16) 5	(3) 1	(1) 1			1	(1) 81	(36) 81					49	(1)
3 6	(2) 2	(1) 2				1	(1) 5	(5) 5				1	(1) 1	
4 8	(2) 7	(1) 7	(1) 1				22	(7) 22					4	
5														
6 15	(3) 15		(1) 2			3	(1) 38	(11) 38	2	(1) 1			2	
7 3	(2) 2	(1) 2			1	(1) 1		(1) 1						
8 3	(1) 3							(1) 5						
9 35	(3) 4	(1) 3	(3) 3				26	(12) 26					31	(1) 7
10 18	(6) 1	(1) 1	(1) 1	(1) 1			19	(5) 19	1	(1) 1			4	
11 29	(14) 4	(1) 3	(2) 1	(1) 1		3	(1) 33	(10) 33					9	
12 11	(3) 2	(1) 1	(1) 1				10	(2) 10	1	(1) 1			1	(1) 1
13 12	(1) 2	(1) 2					17	(6) 17						
14 17	(5) 4	(1) 1	(1) 1			1	(1) 9	(4) 9	1	(1) 1			12	
15 12	(4) 3	(1) 3	(2) 3			1	(1) 7	(2) 7					9	
16 16	(6) 1	(1) 1	(1) 1				5	(2) 5	1	(1) 1		1	(1) 11	(1) 3
17 8	(4) 1	(1) 1		(1) 2			10	(3) 10					1	(1) 3
18 12	(2) 2	(1) 2		(1) 1			12	(8) 12						
19														
20 10	(3) 2	(1) 1	(1) 1	(1) 1			5	(3) 5					1	
21 19	(6) 7	(3) 5	(1) 5		1	(1) 3	(3) 3	16	(8) 16				7	
22		(1) 1						8	(3) 8					

※ () は完形品内数

表1 高尾第1遺跡出土石器一覧表(2)

住居址番号	打製石斧	磨製石斧	石匙	石錐	石鑽	磨石	横刃形石器	石皿	凹石	スクレーパー	ドリル	石棒	黒曜石片	その他
30 24	(12) 4	(1)				1 (1)	16 (9)		2 (2)				2	
31 34	(20) 14	(8) 8	(0)		4	2 (1)	30 (8)		1 (1)		1 (0)	7	2 (0)	
32 22	(5) 2	(1) 2	(0)			1 (1)	14 (6)					2		
33 8	(7) 1	(0) 4	(2)			1 (1)	3 (3)		1 (1)					
34 14	(9) 2	(1) 2					23 (16)		1 (1)	1 (1)		6		
35 6	(0) 3	(0) 3	(2)					3 (2)			1 (0)	6		
36 9	(0) 9							3 (2)						
37 21	(7) 2	(1) 10	(6)			2 (2)	2 (2)	24 (8)	5 (5)				2	
38 35	(25) 5	(2) 3	(2)	1 (1)	6	(6) (1)		34 (21)	1 (1)	1 (1)	1 (1)		1	
40 9	(6) 3	(0) 1	(1)	(0)			2 (1)	8 (6)	1 (1)				3	
41 1	(1) 1	(2) 2	(2)			1 (1)	1 (1)	1 (1)						
42 7	(6) 7						1 (1)	1 (1)						
43 26	(13) 4	(1)					1 (1)	30 (13)	2 (0)		2	1 (0)		
44 10	(4) 1	(0) 1						2 (1)	1 (1)					
45 4	(1) 4	(0) 1						2 (0)				1		
46 3	(3) 3													
47 7	(6) 7		(1)				1 (1)					1		
48 2	(2) 2	(1) 1										2		
49 4	(0) 4						4 (1)	1 (0)	1 (1)		1 (1)	1 (0)		
50 4	(3) 4	(0) 1												
A地区 表抜 56	(22) 14	(6) 8	(1)	(1)	(1)	1 (1)	33 (1)	5 (2)	1 (1)			125		
B地区 表抜 15	(9) 3	(2) 2				2 (2)	1 (1)	6 (2)	6 (1)					
合計	(23) 644	(40) 125	(33) 68	(6) 10	(16) 24	(23) 30	(247) 591	(4) 13	(22) 25	(2) 2	(1) 1	(2) 5	(0) 308	(0) 19

※ () は完形品内数



① (1住)

② (11住)



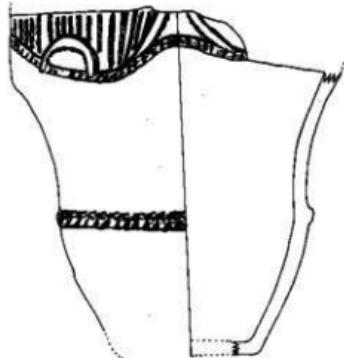
③ (25住)

④ (28住)

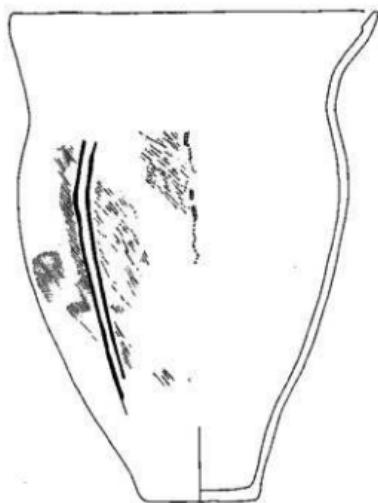
第51図 土器実測図 (1 : 4)



⑥ (15住)



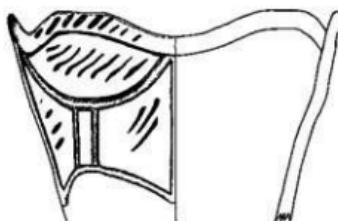
⑥ (15住)



⑦ (16住)

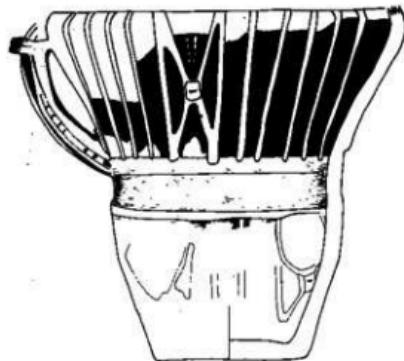


⑧ (20住)

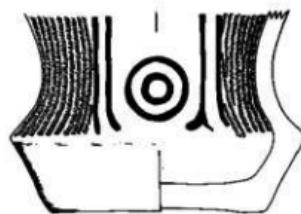


⑨ (37住)

第52図 土器実測図 (1 : 4)



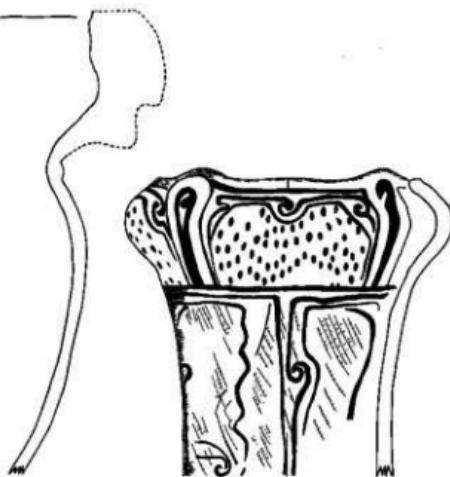
⑩ (37住)



⑪ (37住)



⑫ (41住)

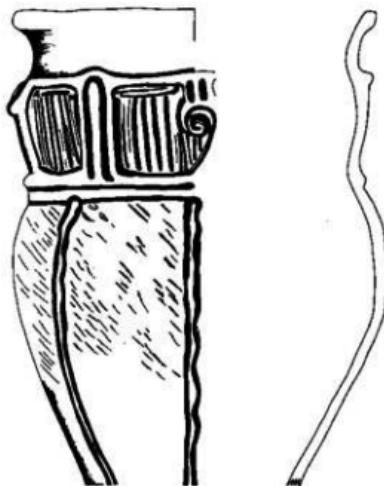


⑬ (40住)

第53図 土器実測図 (1 : 4)



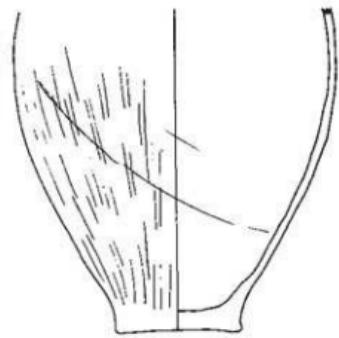
⑩ (44住)



⑪ (44住)

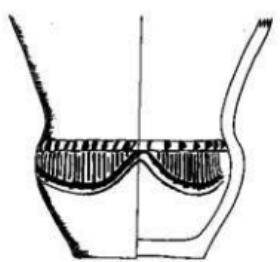


⑫ (47住)



⑬ (46住)

第54図 土器実測図 (1 : 4)



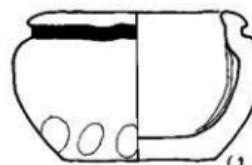
◎ (47住)



◎ (47住)

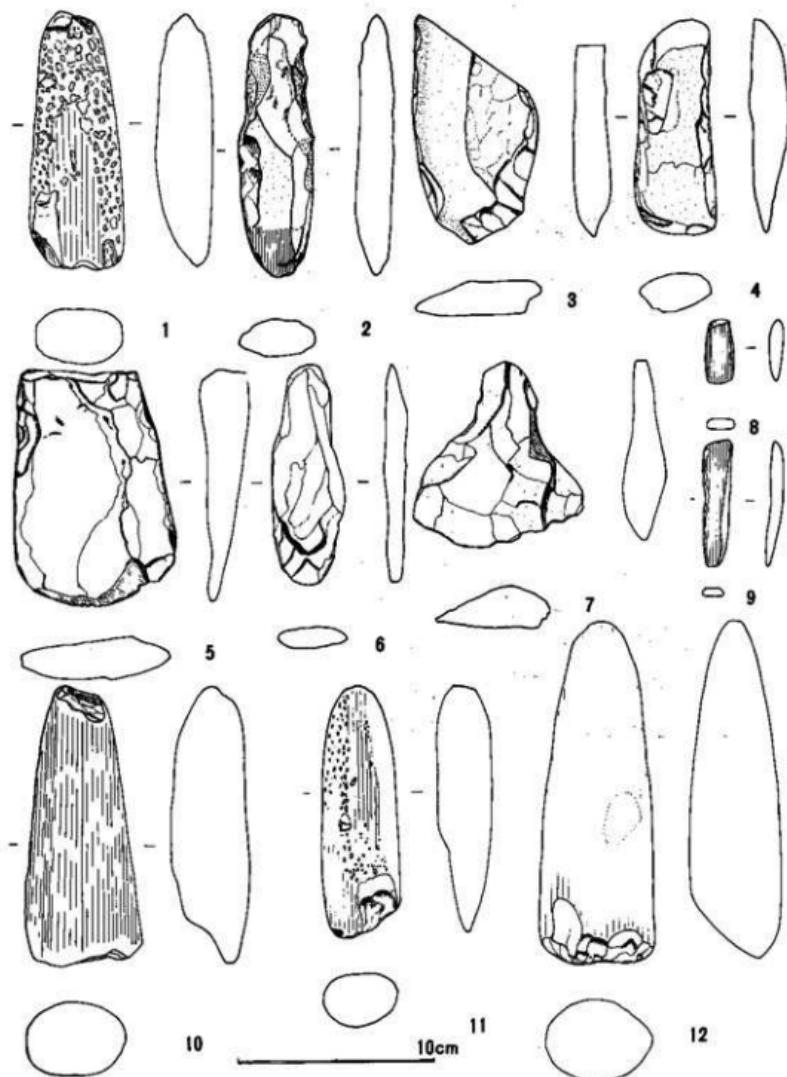


◎ (50住)



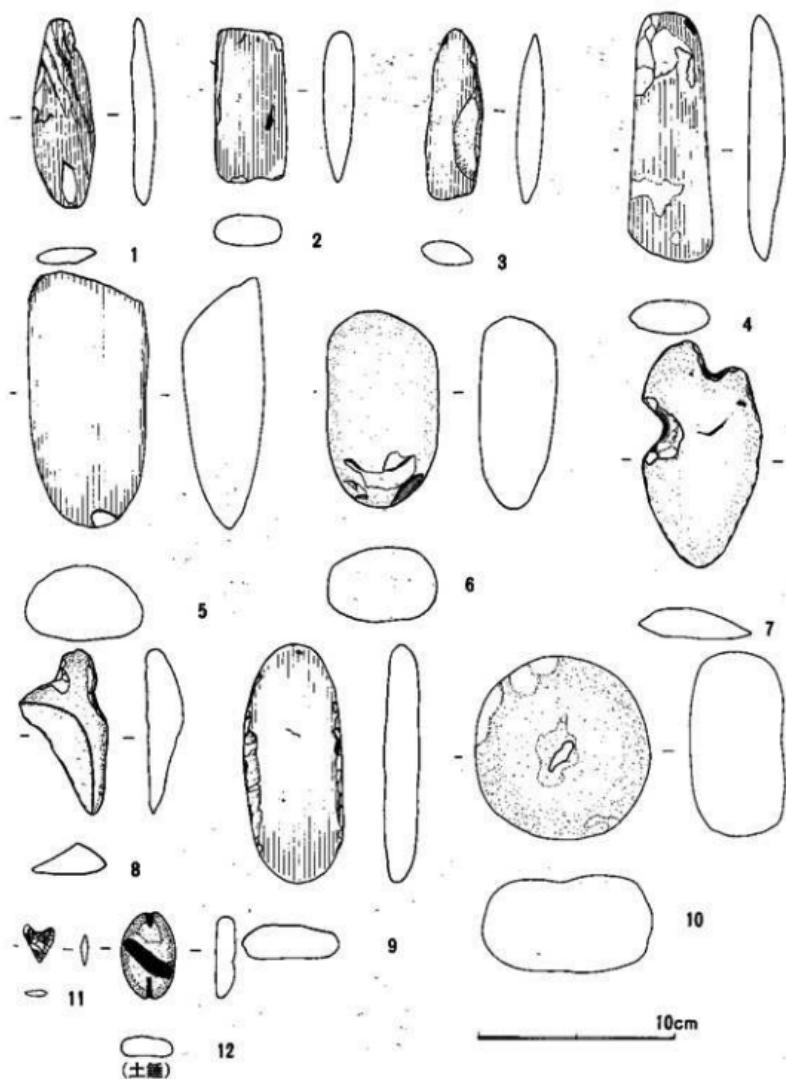
◎ (28住)

第55図 土器実測図 (1 : 4, 1 : 2)



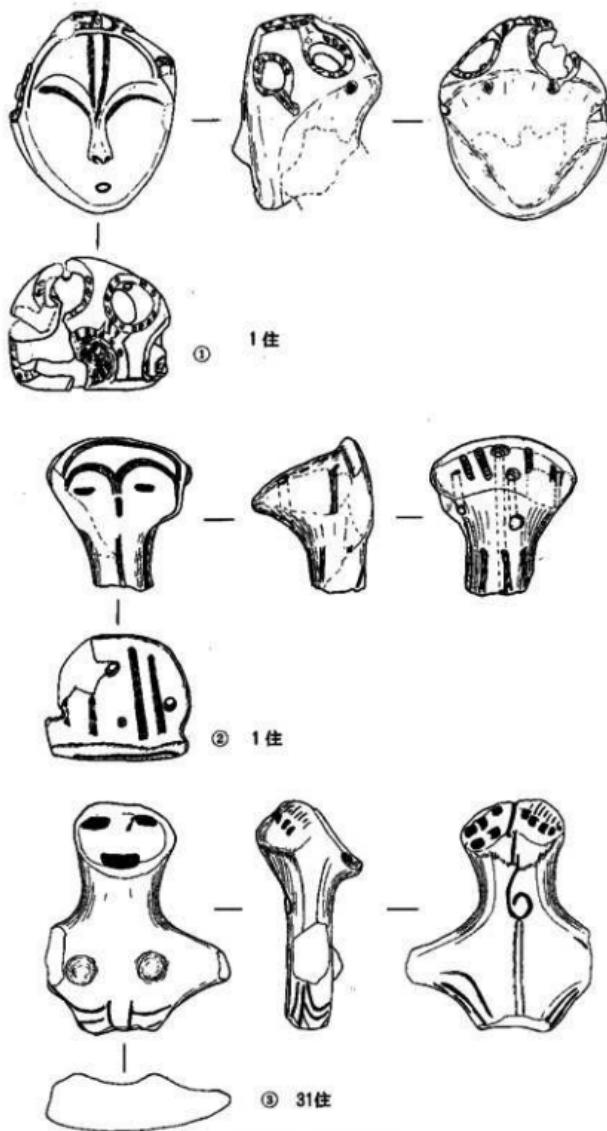
1・2・5・10・11(表探) 3(22件) 4(11件)
7(30件) 6・8・9(41件) 12(46件)

第56図 石器実測図 (1 : 3)

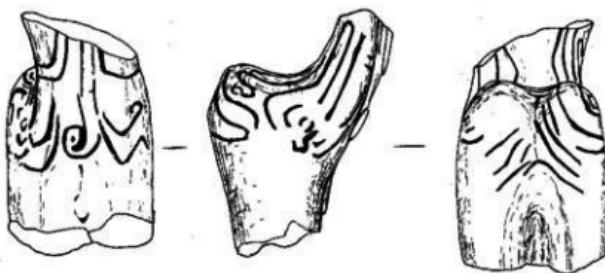


1・4・6・7(表探) 10(12住) 5(22住) 11(30住)
2・3・8(41住) 9(46住) 12(22住土錐)

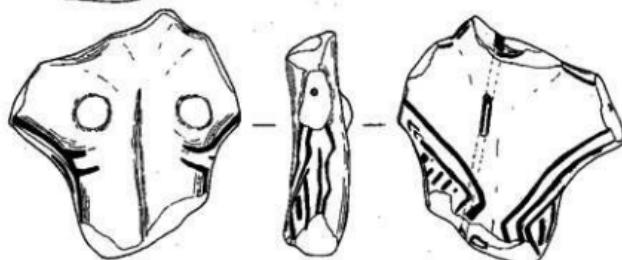
第57図 右器・土製品実測図 (1 : 3)



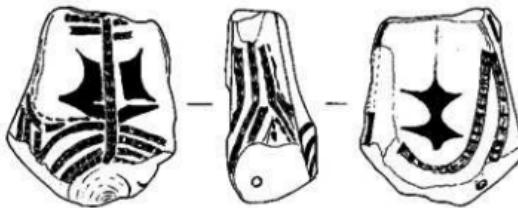
第58図 土偶実測図



④ 49住



⑤ 21住



⑥ 15住

第59図 土偶実測図 (1 : 2)

⑧第41号住居址出土土器で、口縁部に渦巻文と曲線文の先が小渦巻を作る文様で飾られ、頸部から胴部は地文が細い刺目が引された上に、沈線による蕨手文の文様が施された曾利Ⅱ式に比定される深鉢型土器である。

⑨第40号住居址出土土器で、口縁部縁位に渦巻文による区画がなされ、口唇の下部に曲線文と刺突文が施文されている。胴部は地文が繩文でそのうえに蕨手状文が施された曾利Ⅱ式に比定される土器である。

⑩第44号住居址出土土器で、口縁部が一部欠損した土器、口縁部は隆線による渦巻文と平行沈線文が施され頸部から胴部に曲線文や蕨手文が描かれた曾利Ⅱ式に比定される土器である。

⑪第44号住居址出土の深鉢型土器、口縁部垂文で頸部との間は隆線で8区画され、区内は、縁位に平行沈線文でうめられている。胴部は、繩文地の上に沈線による蛇行線文が施されている曾利Ⅱ式の範ちゅうに入ると考えられる土器である。

⑫第47号住居址出土土器で、口縁部無文の帯の壺型土器である。頸部以下に大柄な唐草文が施された曾利Ⅱ式土器である。

⑬第46号住居址出土土器で、口縁部を欠いた無文の弥生後期座光寺原に比定される土器である。

⑭第47号住居址出土の胴部以上を欠いた壺型土器。底部に近くエプロン状の隆帶に刻目が施された井戸尻Ⅱ式に比定される土器である。

⑮第47号住居址出土土器で、口縁部に把手が付き、頸部横位の沈線文の先端に渦巻文が描かれ、胴部は渦巻文と平行沈線が施文された曾利Ⅱ式に比定される深鉢型土器である。

⑯第50号住居址出土土器で、口縁部が僅か欠けた壺型土器で胴部に豪華な唐草文で飾られている曾利Ⅱ式に比定される土器と思われる。

⑰第28号住居址出土土器で、無文の小壺で、口径8cm、胴部の径9cm、高さ5.3cm、顔料（第二酸化鉄）が入っていた土器である。

2. 小型土器

今回の調査で4個（28住、34住、41住、51住）の小型土器が出土した。第28号住居址出土の小型土器第55図④は「ベンガラ」を貯蔵した（後述）土器であることが確認された。また第34住出土の土器は、第28号出土の小型土器を僅かに大きくしたもので、内側器面には、赤色顔料の痕跡がみられる。

3. 吊手土器

第41住より1個体出土した。底部の径7.5cm、口縁部の径13cm、高さ7cmの無文で、吊手部分が欠落している。

4. 土偶

今回の調査で6個の土偶が出土した。第58図②、第59図⑥、⑦には頭部、胴部に穿孔がみられる。

5. 石器

今回の調査で合計 1,557 個の石器が出土した。内訳は完形品 649 個、欠損品 908 個である。石器の種類と種類別の内訳は一覧表のとおりである。最も出土数の多い石器は打製石斧で、ついで横刃形石器、磨製石斧と続いている。打製石斧は、大部分が砂岩製で、一部に緑泥岩のものがある。磨製石斧は刃部を磨いた局部磨製のものが多く、材質も緑泥岩製が多い。石匙は砂岩製の大型のものが多く黒曜石製、チャート製の小型のものは少ない。石皿、凹石は多く出土したが、開田当時にも相当数出土している。スクレーパー、ドリル、石鎌等は発掘調査では出土が少なかったが、過去の表面採集で多数出土した。その他、過去の表面採集で有孔小珠が数点出土している。

赤色顔料貯蔵土器と顔料の種類

成瀬正和

高尾第一遺跡第28号住居址西壁付近の床面より赤色顔料を貯えた小型土器が出土した（第55図④）。同住居址は付設された埋甕（第51図④）から曾利Ⅱ併行期であると考えられる。小型土器は器壁が厚く、口縁下に1本の太い沈線が巡るが、他は無文であり、該期の一般的な土器ではない。当初より顔料貯蔵の目的をもって製作されたものであろう。

縄文時代に確実に用いられた赤色顔料としてはベンガラ（酸化第二鉄 Fe_2O_3 ）と朱（赤色硫化水銀 HgS ）が知られている。小型土器内に貯えられた赤色顔料の種類を調べるために、蛍光X線分析およびX線回折分析を試みた。前者は赤色の由来となる物質の主成分元素の検出を、また後者は赤色の由来となる鉱物成分の同定を目的としている。

蛍光X線分析には理学電機製蛍光X線分析装置（大型試料台付）を用い、試料は顔料をそのまままで薬包紙に包んだものを使用し、X線管球；クロム対陰極、分光結晶；フッ化リチウム、印加電圧—電流；40kV—20mA、検出器；シンチレーション計数管、走査速度； $1^\circ/\text{分}$ 、時定数；2、走査範囲（ 2θ ）； $20^\circ \sim 60^\circ$ 、の条件で行なった。

蛍光X線スペクトルには管球等のバックグラウンドに基づく諸ピークを除けば、鉄に基づくピーク（ $\text{FeK}\alpha$ 57, 49°, $\text{FeK}\beta$ 51, 72°）が顕著に認められた。

X線回折分析には理学電機製ガイガーフレックスを用い、顔料をメノウ乳鉢で300メッシュ以下に粉砕し、これを凹板ガラス試料板に充填し試料を作成して、X線管球；鉄対陰極、フィルター；マンガン、印加電圧—電流；30kV—12mA、スリット系； $1^\circ \sim 0.3 \text{ mm} \sim 1^\circ$ 、検出器；比例計数管、走査速度； $1^\circ/\text{分}$ 、時定数；2、走査範囲（ 2θ ）； $30^\circ \sim 75^\circ$ の条件で行なった。

X線回折スペクトルには石英 [3.34\AA ($\text{FeK}\alpha$ 2θ 33.7°) 等] および赤鉄鉱 [2.69\AA (42.2°), 2.51\AA (45.4°), 1.69\AA (69.8°)] に基づくピークが認められた。石英は土砂の混入の影響によるものと考えられるので、赤色の由来となる鉱物成分は赤鉄鉱であろう。

以上の結果より小型土器内に貯蔵された赤色顔料はベンガラであることが判明した。

なお末筆になりましたが調査団長の友野良一氏、町教育委員会関係各位、および長野県史編さん室の宮下健司氏には大変お世話になり、御礼申し上げます。

第V章 まとめ

高尾第1遺跡の調査は、面積整備工事関連の緊急発掘として行なわれた。本遺跡はきわめて大規模な遺跡で発掘面積も広く、遺構、遺物も多かったため、事後の整理と研究は、相当長期間必要なため、ここでは、発掘調査の過程において、知り得た事柄と問題点を記し、今後の研究の参考に資したい。

1. まず第一に、本遺跡の規模と立地についてであるが、工事上その他の問題から台地上の中心部と考えられる地点を選定し、発掘した。面積は、約4000m²で、縄文中期井戸尻併行期3・14・35・38号住居址の4軒、曾利I式期A2・36号住居址の2軒、曾利II式期A7・8・9・11・12・13・17・20・21・22・24・26・27・29・30・31・32・33・40・41・43・45・48・49・50号住居址の25軒、B6・15・16・18・25・28・34・37・42・44・47・51号住居址の12軒。曾利III式期1・39号住居址の2軒、弥生時代後期前半（座光寺原）期は、4・5・10・46号住居址の4軒の合計49軒の住居址を調査した。また過去に行なわれた発掘調査、表面採集による分布調査の成果と合わせて少なくとも東西150m、南北約100mの広さをもつ東西に長い舌状台地を全面的に占拠した縄文中期中葉に始まり後葉期と、弥生後期の二時代に営まれた複合集落址であることを確認した。集落の形態は、今回発掘した地点が中心で、その東と西に広場をもち、その広場の外側に小集落が営まれた形態の中心外周構造をもつ集落形と考えられる。

集落は井戸尻期に始まり、曾利I期は少数で、曾利IIA期に25軒という最盛期を迎える。曾利IIB期には、12軒に減少する。曾利III期の初期をもって消滅した縄文中期の集落ということになる。そして、本遺跡に隣接する町谷遺跡弥生後期と共に弥生時代の集落が営まれた遺跡である。

2. 縄文時代の住居址の形は、円形・楕円形・隅丸方形の三種類である。住居の面積は最少が12m²、最大が36m²である。平均24m²である。柱穴は基本的には4本柱であるが、5本～6本ある。炉は地床炉と石囲炉の二種類である。また、1軒が必要とした面積は77m²であった。これは他の種々の集落占地形との比較という立場で考えることもできるが、本遺跡としての場において計算上の数値である。今後集落構造研究の参考に供したい。

遺物。土器の型式と編年については、井戸尻・曾利の編年を基準にした分類である。井戸尻II式～曾利I式～II式～III式が認められた。しかし、本遺跡にあっては、全く、井戸尻の土器も見受けられるが、よく観察すると井戸尻とは異なる土器であって問題となった。曾利式も井戸尻土器と同様である。伊那谷中部は東海系の呪煙、中富などの関係を考慮して、伊那谷の中葉後半の土器の編年の作成を早急にせまられている。

その他の遺構。遺跡の南西に土塙群が発見された。この土塙群は第2・3・4・5・22号住居址の西側に集中している。土塙は全部で49基発見された。大きさは径80cm～150cmで、円形・楕円形である。遺物は主に縄文中期後葉の土器が多く、時期的には曾利期の時期に造られたようである。本遺跡にあった土塙が一箇所に集中しているということで、住居と土塙の関係が今後の問題となる。

石器。石器一覧表で見るに、打製石斧が一番多く出土した。住居址は、第2号で57個中、完形

（73頁につづく）



P 4 遗踪南全景



P 5 第1号住居址



P 6 第2号住居址



P 7 第3号住居址



P 8 第4号住居址



P 9 第4号住居址



P 10 第5号住居址



P 11 第8号住居址



P 12 第18号住居址



P 13 第24号住居址



P 14 第25号住居址



P 15 第28、29号住居址



P 16 第30号住居址



P 17 第31号住居址



P 18 第26号住居址



P 19 第33号住居址



P 20 第34号住居址



P 21 第37号住居址



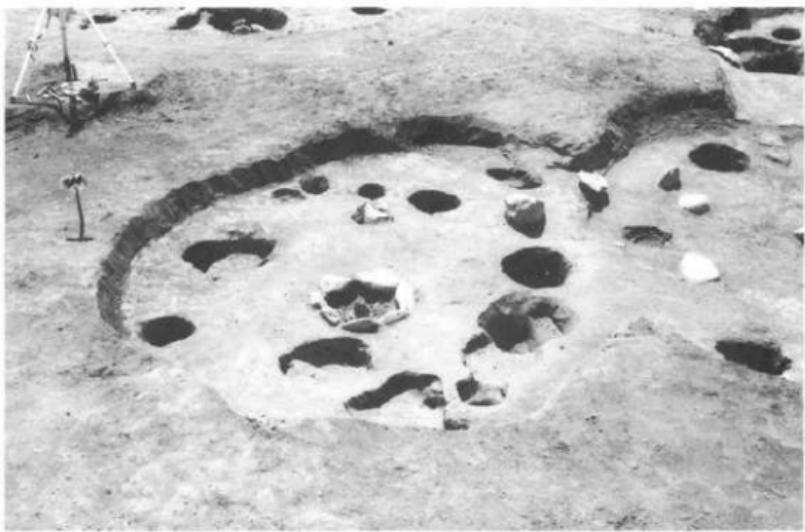
P 22 第35号住居址



P 23 第38号住居址



P 24 第39号住居址



P 25 第40号住居址



P 26 第41号住居址



P 27 第42号住居址



P 28 第43号住居址



P 29 第44号住居址



P 30 第47号住居址



P 31 第50号住居址



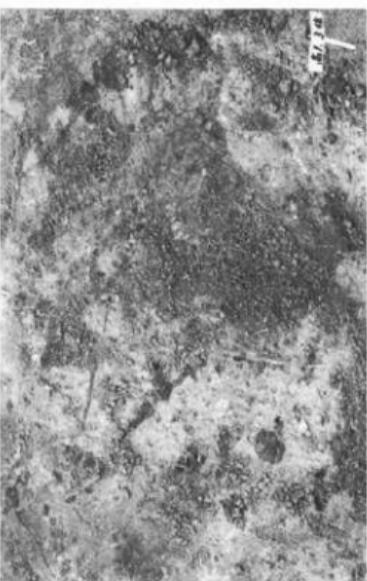
第2号住居址 炉



第4号住居址 中央土堆



第1号住居址 炉



第3号住居址 炉(?)

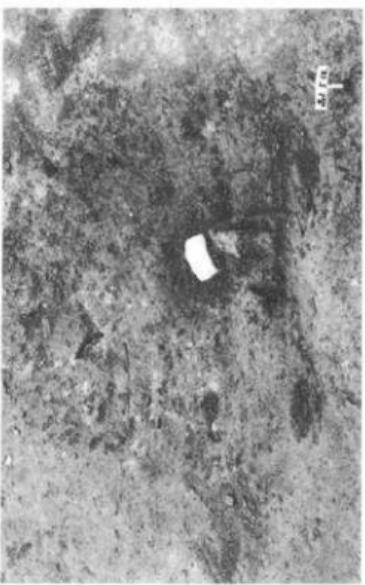
P 32 炉



第6号住居址 炉



第8号住居址 炉



第5号住居址 炉



第7号住居址 炉

P 33



第11号住居址 炉



第22号住居址 炉



第9号住居址 炉



第17号住居址 炉

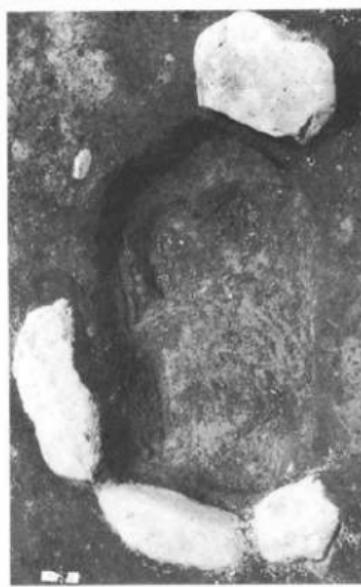
户34 炉



第30号住居址 炉



第35、38号住居址 炉



第26号住居址 炉



第33号住居址 炉

品16個もあった。一番少ない住居址41号で打製1個、完形1個であった。打製石斧の合計644個内完形253個、平均1軒の所有数は約13個である。完形品の残存率は、約40%であるという数値を得た。このことは、生業との関係で重要な意味をもつものと思われる。磨製石斧125個内完形品が40個約30%、石匙68個内完形品33個50%、石錘10個内完形が6個、石鐵24個内完形が16個66%、磨石は30個内完形23個77%、横刃形石器590個内完形247個42%、石皿13個内完形4個30%、圓石25個内完形22個約90%、スクレーパー2全部完形、ドリル1、石棒5個で、完形2個、黒曜石片308個を確認することができた。

報告書の作成にあたり、多くの方より献身的な御支援をいただいたことに対して、心より感謝の意を表するものであります。

(団長 友野良一)



第36号住 爐



第37号住 爐



土壤 21



土壤 13



土壤 4



土壤 6

P37 土 壤



第10号住 出土



第15号住 出土



第16号住 出土



第17号住 出土



第17号住 出土



第17号住 出土



第18号住 出土



第18号住 出土

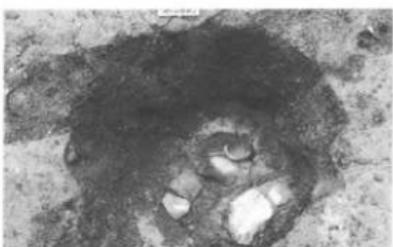
P 38 土器出土状况



第20号住 出土



第20号住 出土



第22号住 出土



第25号住 出土



第28号住 出土



第28号住 出土



第28号住 出土

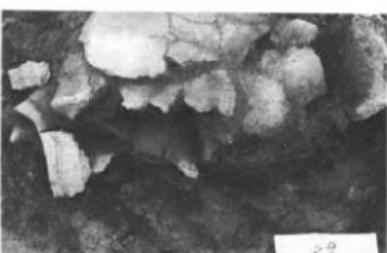


第28号住 出土

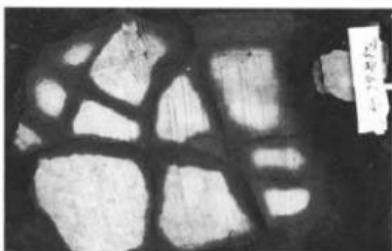
P 39 土器出土状况



第29号住 出 土



第29号住 出 土



第29号住 出 土



第29号住 出 土



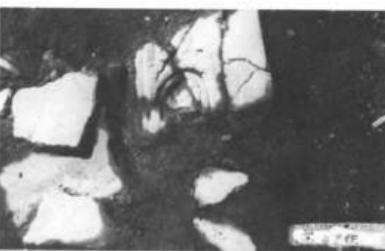
第29号住 出 土



第29号住 出 土



第29号住 出 土



第29号住 出 土

P 40 土器出土状况



第29号住 出 土



第29号住 出 土



第29号住 出 土



第33号住 出 土



第36号住 出 土



第36号住 出 土



第37号住 出 土



第37号住 出 土

P 41 土器出土状况



第37号住 出土



第37号住 出土



第37号住 出土



第37号住 出土



第40号住 出土



第43号住 出土



第43号住 出土



第44号住 出土

P 42 土器出土状况



第44号住 出土埋甕



第47号住 出土埋甕(1)



第47号住 出土



第47号住 出土



第47号住 出土



第49号住 出土



第50号住 出土



第50号住 出土

P 43 土器出土状况



25住



16住



28住



41住

P 44 出土土器



47住



43住



47住



46住



1住

P 45 出土土器



44住



37住



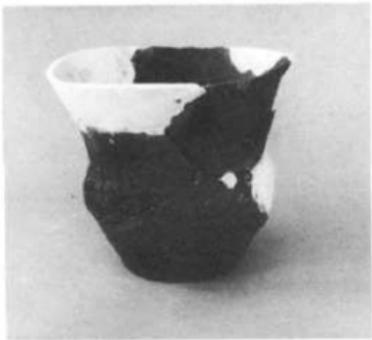
44住



16住



51住



47住

P 46 出土土器



15住



40住



33住



28住



37住

P 47 出土土器



50住

本郷原林遺跡

目 次

目次、挿図目次、図版目次

第Ⅰ章 遺跡の概観	(2)
第1節 位置	(2)
第2節 地形・地質	(2)
第Ⅱ章 発掘調査の経過	(4)
第1節 発掘調査に至るまで	(4)
第2節 調査日誌	(4)
第Ⅲ章 造構	(5)
縄文時代の住居址	(6)
平安時代の住居址	(13)
第Ⅳ章 遺物	(14)
第Ⅴ章 まとめ	(19)

挿 図 目 次

第1図 位置図 (1 : 100000)	第2図 地形図 (1 : 2000)
第3図 造構配置図 (1 : 200)	第4図 第1号住居址 (1 : 60)
第5図 第2号住居址 (1 : 80)	第6図 第3号住居址 (1 : 80)
第7図 第4号住居址 (1 : 60)	第8図 第5号住居址 (1 : 60)
第9図 第6号住居址 (1 : 60)	第10図 第7号住居址 (1 : 60)
第11図 出出土器 (1 : 4)	第12図 出出土器 (1 : 4)
第13図 出出土器 (1 : 3)	第14図 出出土器 (1 : 2)

図 版 目 次

P 1 遺跡航空写真	P 2 遺跡航空写真
P 3 遺跡航空写真	P 4 遺跡全景
P 5 トレンチ調査	P 6 第1号住居址
P 7 第2号住居址	P 8 第3号住居址
P 9 第4号住居址	P 10 第5号住居址
P 11 第6号住居址	P 12 第7号住居址
P 13 第8号住居址	P 14 第9号住居址土器出土状況
P 15 第11号住居址土器出土状況	P 16 土器出土状況
P 17 土器出土状況	P 18 土器出土状況

第1章 遺跡の概観

第1節 位置

本郷原林遺跡は、長野県上伊那郡飯島町大字木郷1960番地の4に所在する。

遺跡は、天竜川の河岸段丘上に位置する。遺跡に至るには、国鉄飯田線伊那本郷駅で下車し、南へ約500mほど歩いたところである。遺跡の中心で標高659mをはかる。

第2節 地形・地質

当遺跡は、中央アルプスより流れる与田切川により形成された扇状地の扇端部に位置する。遺跡の東側は天竜川の河岸段丘となり、南側は東西に走る窪地となっている。

調査地区の土層については、疊層の基盤の上にローム層、黒褐色土層、耕作土層が堆積している。



第1図 位置図 (1 : 100,000)



第2図 地形図 (1 : 2000)

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまで

県営は場整備事業七久保地区第26工区にある本郷原林遺跡の埋蔵文化財緊急発掘調査を飯島町では、飯島町遺跡調査会に委託し実施した。

〔飯島町遺跡調査会〕

会長	熊崎安二	(教育長)
理事	片桐修	(飯島町文化財調査委員)
	宮下静男	(")
	北原健三	(")
	桃沢匡行	(")
	松崎研定	(")
	中島淑雄	(")
	片桐佳彦	(")
	小林嘉男	(")
監事	池上勇	(飯島町監査委員)
	中野武司	(")
幹事	吉沢内次	(飯島町教育委員会教育次長)
	米沢長実	(" 係長)
	伊藤修	(" 主事)
	宮下淑江	(" 主事)

〔発掘調査団〕

团长	友野良一	(日本考古学協会員)
調査員	伊藤修	(飯島町教育委員会主事)
"	和田武夫	(長野県考古学会員)
調査補助員	富永芳一	(飯島町)

第2節 調査日誌

本郷原林遺跡の調査における主だった項目を拾ってみた。

○調査は、昭和55年8月1日より着手し、昭和56年3月20日に完了した。

○調査は、調査地区全体に2m四方のグリッドを設定し行なった。

○遺物について、主要なものは平面図に出土点、出土高等を記録した。

○遺構については、平面図の他にできる限り遺構断面の土層についても記録を行なった。

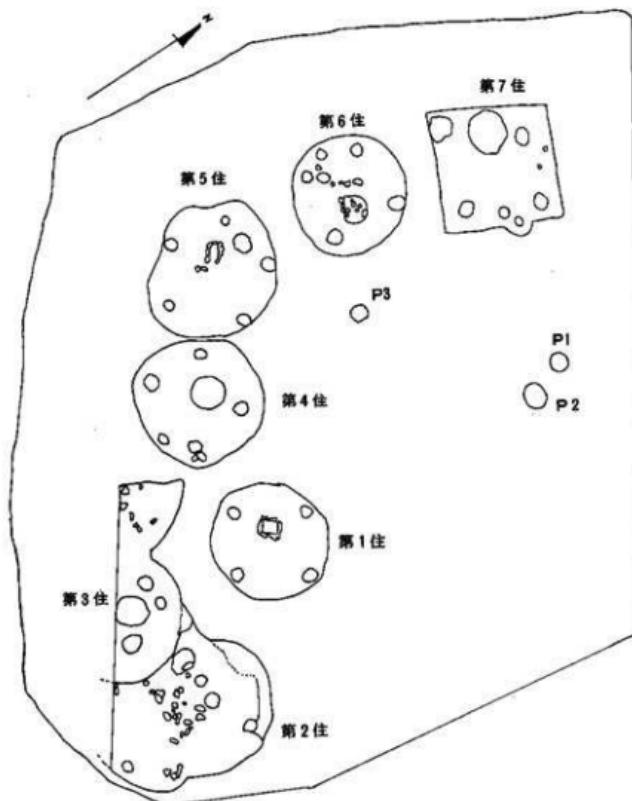
第Ⅲ章 遺構

今回は遺跡の東側を中心に調査を行なった。その結果、縄文時代中期の住居址12軒を確認した。このうち住居址の全容を明らかにできたのは7軒である。住居址は、さらに付近一帯、東側にある丸山遺跡まで分布していると思われる。

住居址は、東西に走る舌状台地の南面に直列にみられ、その内側の台地中央部は空白部分となっている。

しかし、今回は部分的な調査であり、また開田により相当遺構が破壊されていると考えられ集落の形態を明らかにするまでにはいたらなかった。

また当地区の西約120mの水田から平安時代の住居址が1軒確認された。

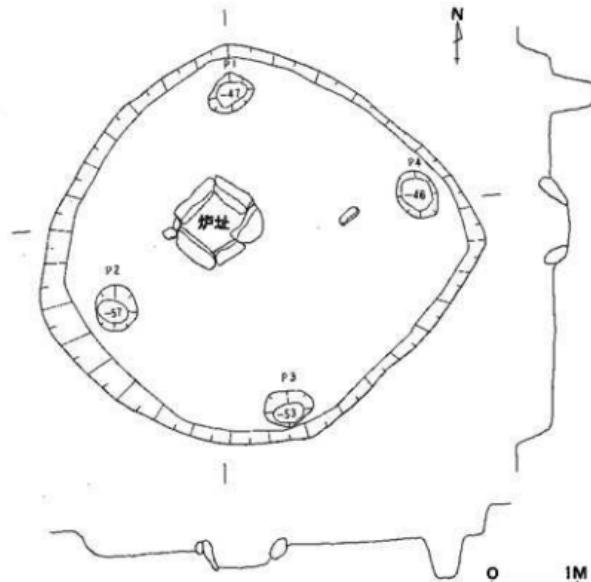


第3図 遺構配置図 (1 : 200)

縄文時代の住居址

第1号住居址

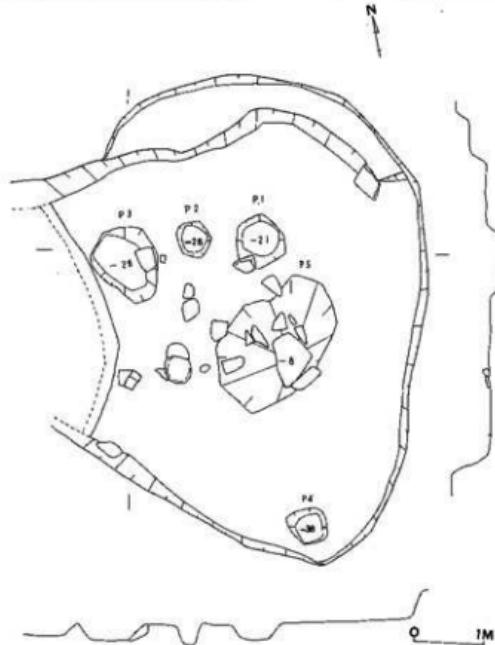
本 坂 位 置	調査地区中央やや南東						
ブ ラ ン	隅丸方形	規 模	南北 - 4.6 m 東西 - 5.0 m	主軸方向	東 - 西		
壁 高	南40cm 東35cm	北40cm 西30cm	壁の状態	直に近くしっかりしている			
床	ローム層を掘り込んで造られている。 平坦で硬い。						
周 溝	認められない。						
住 穴	4箇所	主柱穴	P ₁ ~ P ₄				
炉 の 位 置	中央やや西	形 式	石 圈 炉	規 模	100 cm × 85 cm		
土 城 壁 外 施 設 そ の 他	認められない。						
遺 物 出 土 状 況	遺物の出土多い。						



第4図 第1号住居址 (1 : 60)

第2号住居址

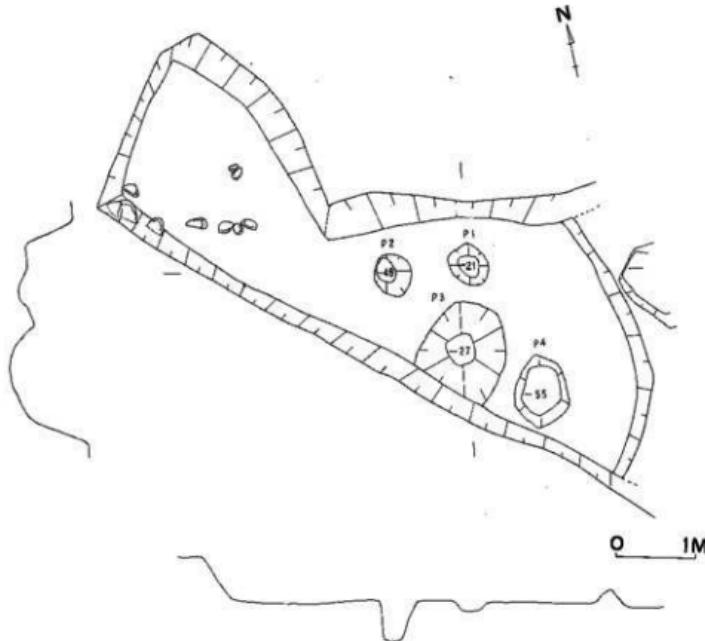
本 坂 位 置	調査地区南東				
ブ ラ ン	不 整 形	規 模	南北 - 6.5 m 東西 - m	主軸方向	
壁 高	南 55 cm 東 40 cm	北 50 cm 西 cm	壁の状態	やや傾斜がみられる。	
床	ローム層を掘り込んで造られている。 平坦であるが比較的やわらかい。				
周 溝	認められない。				
柱 穴	4箇所	主柱穴	P4		
炉 の 位 置	中央や東	形 式	石窯炉と思われる	規 模	200 cm × 140 cm
土塙壁外施設 そ の 他	住居址の北側に段差がみられる。				
遺物出土状況	遺物の出土多い。器台出土。				



第5図 第2号住居址 (1 : 80)

第3号住居址

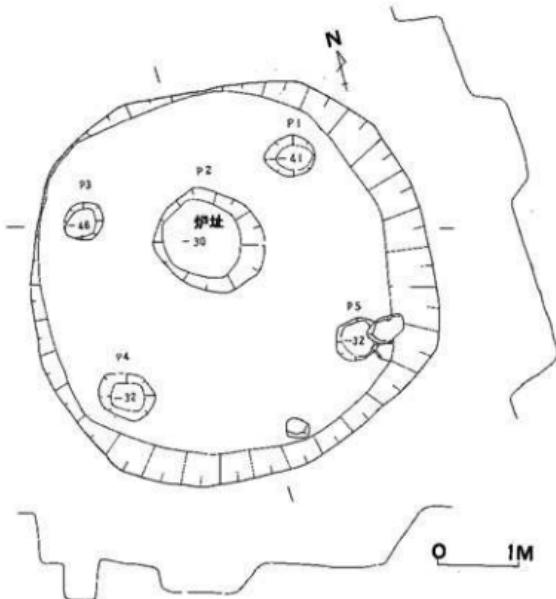
本址位置		調査地区南端						
プラン	円形?	規模	南北- 東西-	m m	主軸方向			
壁面	南 cm 東 cm	北 cm 西 cm	壁の状態		やや傾斜が見られる。			
床	ローム層を掘り込んで造られている。 平坦であるがやわらかい。							
周溝	認められない。							
柱穴	3箇所	主柱穴						
炉の位置		形式		規模	m × m			
土塁壁外施設 その他の	住居址南側半分は、開田により破壊されており確認できない。							
遺物出土状況	遺物の出土多い。小型土器出土。							



第6図 第3号住居址 (1:80)

第4号住居址

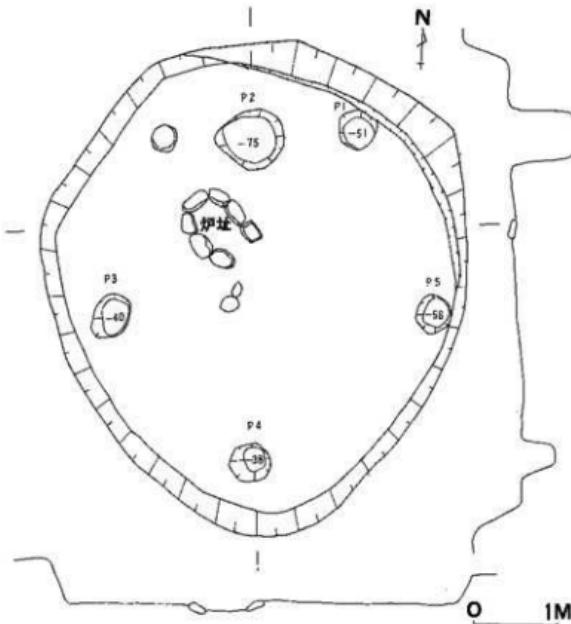
本 坂 位 置		調査地区中央南					
ブ ラ ン	円 形 規 模	南北 - 4.8 m 東西 - 5.0 m		主軸方向	南 - 北		
壁 高	南75cm 東80cm	北55cm 西60cm	壁の状態	やゝ傾斜がみられる。 壁はしっかりしている。			
床	ローム層を掘り込んで造られている。 平坦で硬い。						
周 溝	認められない。						
柱 穴	4箇所	主柱穴	P ₁ , P ₃ , P ₄ , P ₅				
炉 の 位 置	中央やゝ北	形 式		規 模	140 cm × 120 cm		
土塙壁外施設 そ の 他							
遺物出土状況	遺物の出土多い。						



第7図 第4号住居址 (1 : 60)

第5号住居址

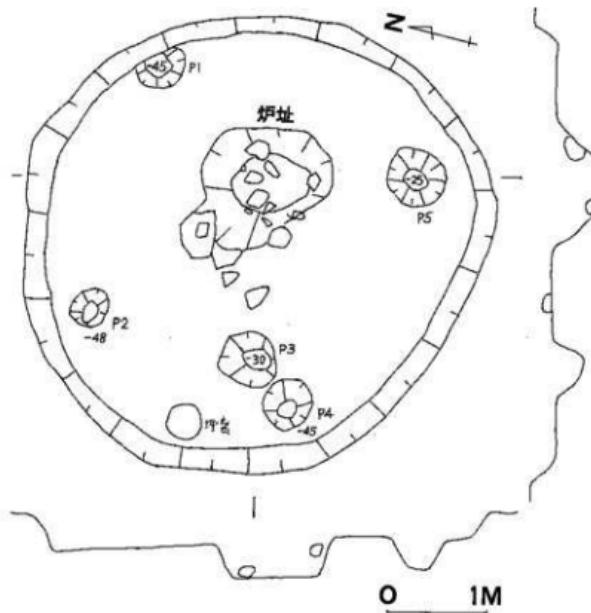
本 坂 位 置	調査地区西側、第4号住居址西						
ブ ラ ン	楕円形	規 模	南北 - 5.9m 東西 - 5.0m	主軸方向	南東-北西		
壁 高	南70cm 東35cm	北55cm 西55cm	壁の状態	直に近くしっかりしている。			
床	ローム層を掘り込んで造られている。 平坦で硬い。						
周 溝	住居址北東側にみられる。						
柱 穴	5箇所	主柱穴	P ₁ , P ₃ , P ₄ , P ₅				
炉 の 位 置	中央や北西	形 式	石囲炉	規 模	100cm×80cm		
土塙壁外施設 そ の 他							
遺物出土状況	覆土下層、床面より遺物の出土多い。小型土器出土。						



第8図 第5号住居址 (1 : 60)

第6号住居址

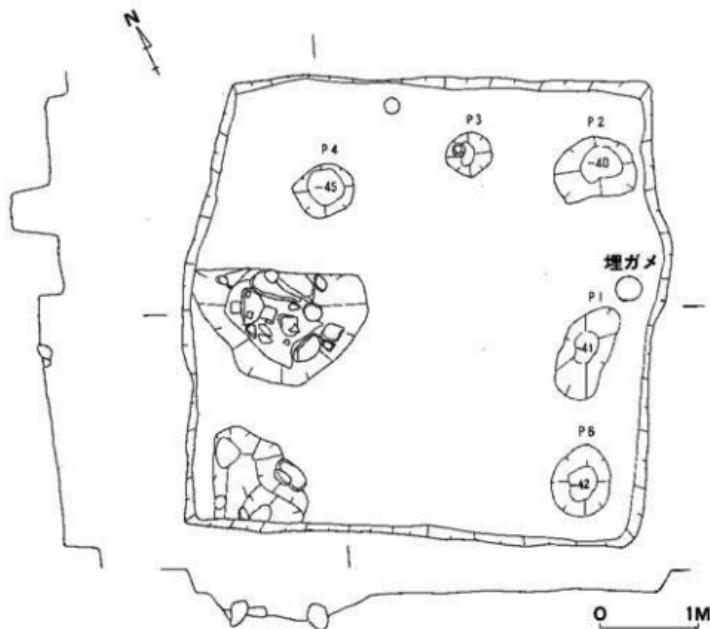
本 坂 位 置	調査地区西側、第5号住居址北						
ブ ラ ン	円 形	規 模	南北 - 4.6 m 東西 - 4.5 m	主軸方向	東 - 西		
壁 高	南25cm 東25cm	北40cm 西25cm	壁の状態	やや傾斜がみられる。			
床	ローム層を掘り込んで造られている。 平坦で硬い。						
周 溝	認められない。						
柱 穴	5箇所	主柱穴	P ₁ ~ P ₄				
炉 の 位 置	中央やや東	形 式	石 囲 炉	規 模	140cm × 100cm		
土塙壁外施設 そ の 他							
遺物出土状況	住居址西壁付近に埋甕がみられる。遺物の出土多い。						



第9図 第6号住居址 (1 : 60)

第7号住居址

本 坂 位 置		調査地区北側			
ブ ラ ン	方 形	規 模	南北 - 4.7 m 東西 - 4.7 m	主軸方向	東 - 西
壁 高	南35cm 東25cm	北25cm 西25cm	壁の状態	直に近い 開田により上部は破壊されている。	
床	ローム層を掘り込んで造られている。 平坦で硬い。中央部は浅い凹となっている。				
周 溝	認められない。				
柱 穴	5箇所	主柱穴	P ₂ , P ₄ , P ₆		
炉 の 位 置	中央西側	形 式	石窯炉と思われる	規 模	180 cm × 110 cm
土塙壁外施設 そ の 他					
遺物出土状況	住居址東側壁付近に埋甕がみられる。遺物出土多い。				



第10図 第7号住居址 (1 : 60)

第9, 10, 11, 12, 13号住居址

調査地区北側の3本のトレンチ溝により確認された。出土遺物よりみて縄文時代中期の住居址である。

平安時代の住居址

第8号住居址

本 坂 位 置		調査地区西側、縄文時代の集落より西へ約120m					
ブ ラ ン	方 形	規 模	南北— 東西—	m m	主軸方向		
壁 高	南 cm 東 cm	北 cm 西 cm	壁の状態	直に近い			
床	ローム層を掘り込んで造られている。 平坦でやわらかい。中央付近に土塙が多い。						
周 溝	認められない。						
柱 穴	9箇所	主柱穴					
カマドの位置	西壁中央	形 式	石組粘土カマド	規 模	m × m		
土塙壁外施設 そ の 他							
遺物出土状況	土師器、灰釉陶器出土。遺物の出土は、カマド付近に多い。						

第Ⅳ章 遺物

(1)土器

今回の調査で、多くの土器、石器が出土した。土器の多くは、開田当時に遺跡が破壊されたため、完形のものは少なく、小破片である。いずれも曾利系、あるいは加曾利系の土器であり、縄文時代中期末葉のものである。住居址別にみると下記のとおりとなる。第13図No.4は、第2号住居址覆土より出土した器台であり、ほぼ完形のものである。黄褐色を呈し無文である。台部上面は、水平で良く調整されている。また、第6号住居址からは台付土器の底部が出土し、第7号住居址からは、台付土器と思われる土器が出土した。第3号・第5号住居址からは小型（ミニチュア）土器が出土している。

トレンチによる調査が行なわれた第9～13号住居址からも多くの土器が出土した。第12図No.2は、今回の出土の土器の中でも、最も大型のものである。この他有孔鉢付土器の破片がみられた。

調査地区の西方からは、平安時代の住居址が1軒検出したが、他には、平安時代の遺構遺物はみられなかった。

第1住	縄文中期	曾利II式に比定される。
第2住	"	曾利II式に比定される。
第3住	"	加曾利II～III式に比定される。
第4住	"	" "
5住	"	曾利II～III式、大形の甕は曾利I式。
6住	"	曾利II式の台付土器底部が出土した。
7住	"	曾利III式に比定される。
8住	"	平安時代の住居址、底部系切底内黒碗 灰釉陶器、10世紀と考えられる。

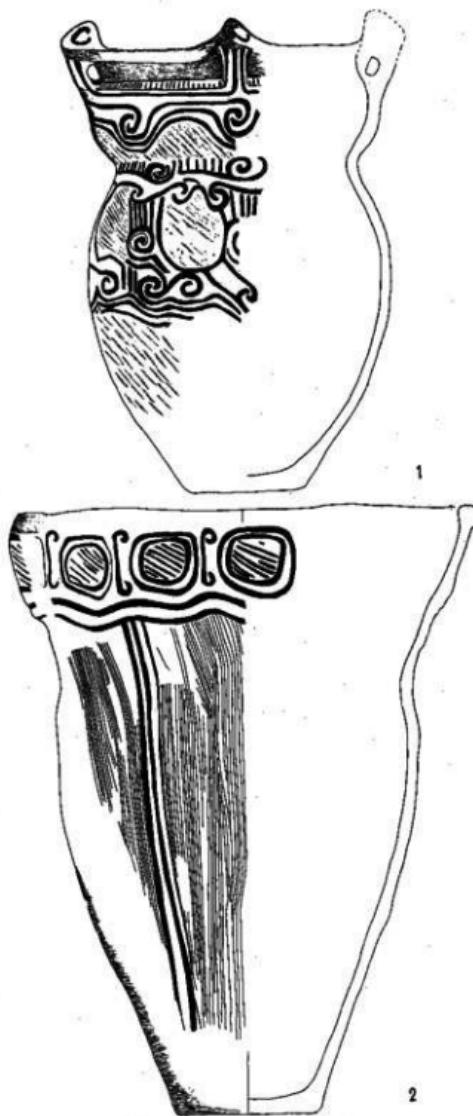
(2)石器

土器に比べ石器の出土は少なかった。打製石斧、横刃形石器を中心で、他に磨製石斧、石匙、黒曜石片等がみられた。完形の石器は少なく、破片が大部分である。



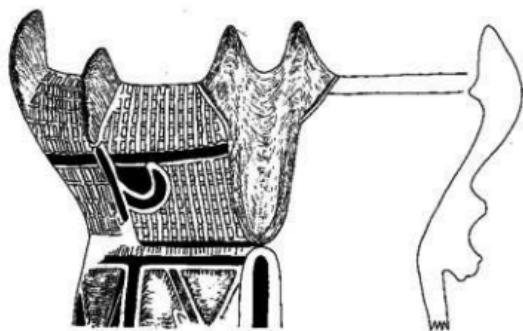
第11図 出土土器 (1 : 4)

1 (第7住No.7) 2 (第7住No.1)

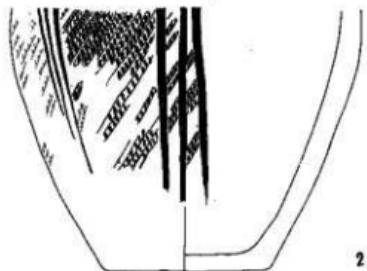


第12図 出土土器 (1:4)

1 (第11住No 1) • 2 (第9住)



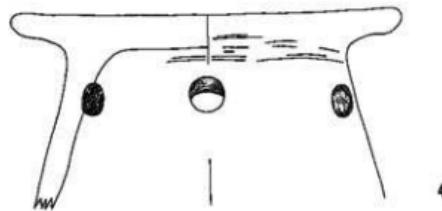
1



2



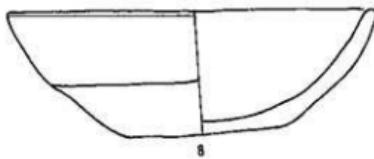
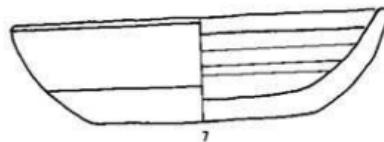
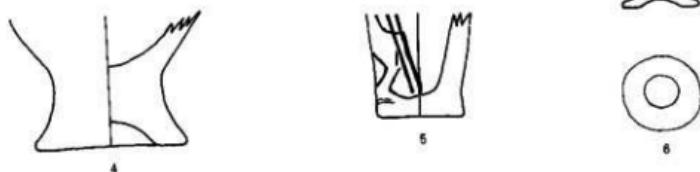
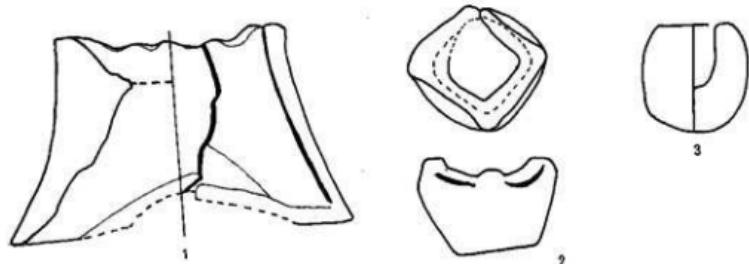
3



4

第13図 出土土器 (1 : 3)

1 (第5住) 2・3 (第13住) 4 (第2住)



第14図 出土土器 (1 : 2)

1 (第6住) 2・3 (第3住) 4・5 (第5住) 7・8 (第8住)

第V章 まとめ

当該遺跡は、飯田線伊那本郷駅の南西に位置し、十王堂沢の上流、左岸段丘上にある。遺跡の南側には堤の窪と呼ばれる凹地があり、ここを中心南側、東側にも縄文時代中期の集落が多くみられる。本遺跡は、このような遺跡群の中にある。

遺構は縄文時代中期住居址12軒、平安時代の住居址1軒が確認された。住居址は東西に長い丘陵であるため、南傾斜面に多く分布していると考えられ、更に東側の丸山地籍に及ぶものと思われる。出土遺物よりみて曾利系と加曾利E系の土器を出土する縄文中期末葉の住居址である。

本郷北羽場遺跡については、本郷中原遺跡の調査に先立ちグリット（2m×2m）調査を行なった。調査の結果、縄文時代中期の土器片及び中世の陶器片が出土したが、遺構は確認されなかった。

報告書の刊行にあたり、多くの方より献身的な御支援をいただいたことに対して心より感謝の意を表すものであります。

（団長　友野良一）

（付記）

本郷北羽場遺跡調査報告

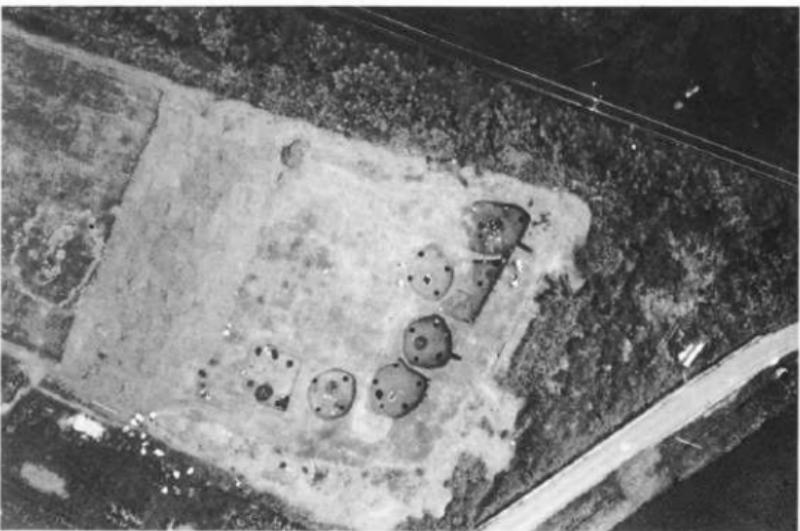
- ① 調査場所 飯島町大字本郷264番地の1
- ② 調査方法 グリット調査（2m×2m）40箇所
- ③ 調査内容
（遺構） 確認されない。
（遺物） 縄文時代中期土器片20点、中世陶器片100点。
（まとめ） 縄文時代中期及び中世の遺物散布地である。



P 1 遺跡航空写真



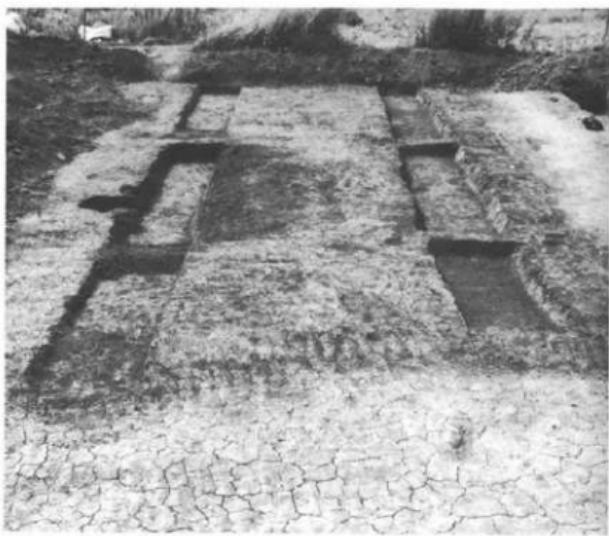
P 2 遺跡航空写真



P 3 遺跡航空写真



P 4 遺跡全景



P 5 トレンチ調査



P 6 第1号住居址



P 7 第2号住居址



P 8 第3号住居址



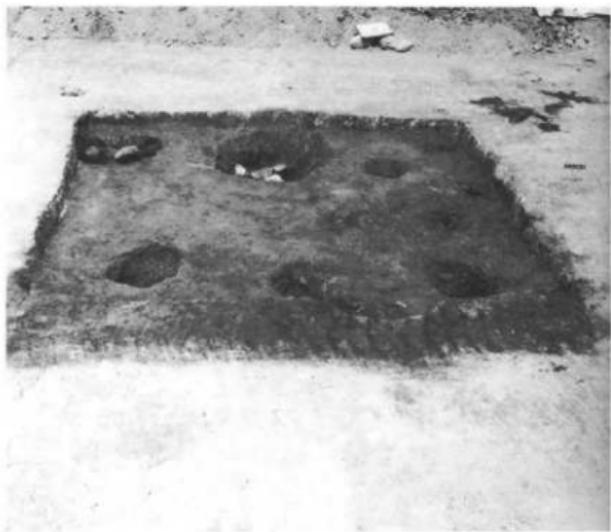
P 9 第4号住居址



P 10 第5号住居址



P 11 第6号住居址



P 12 第7号住居址



P 13 第8号住居址



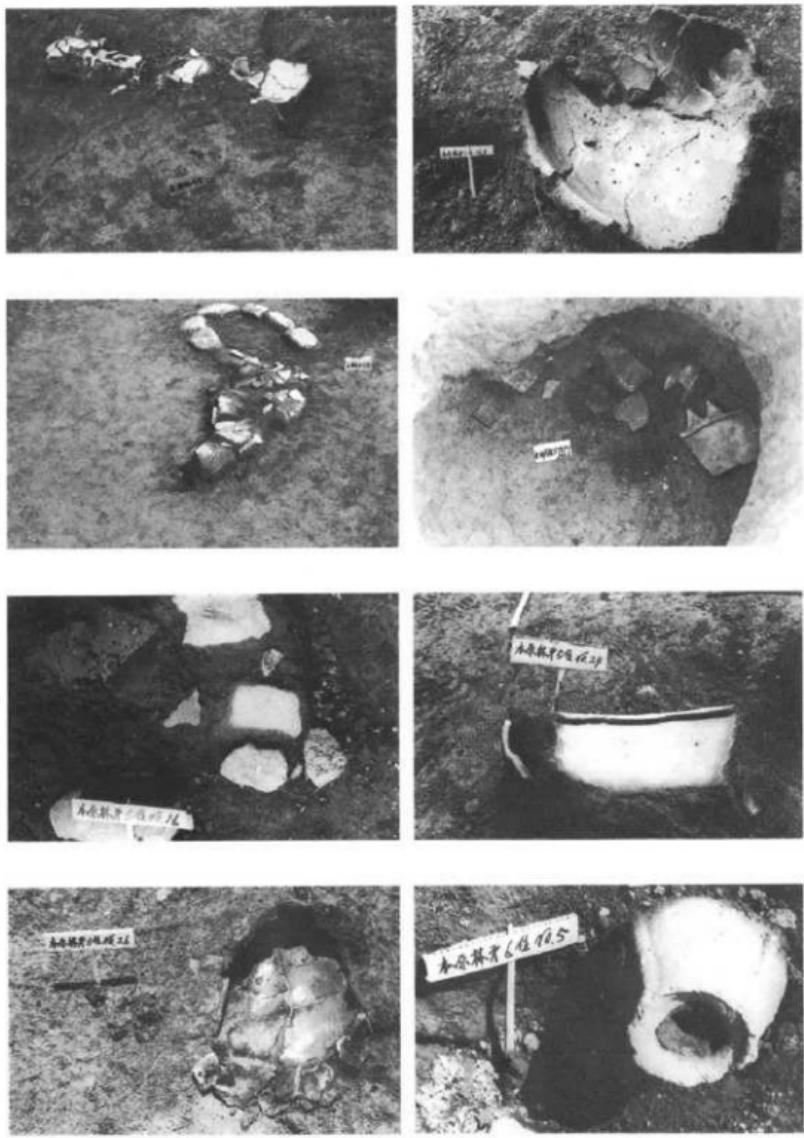
P 14 第9号住居址土器出土状況



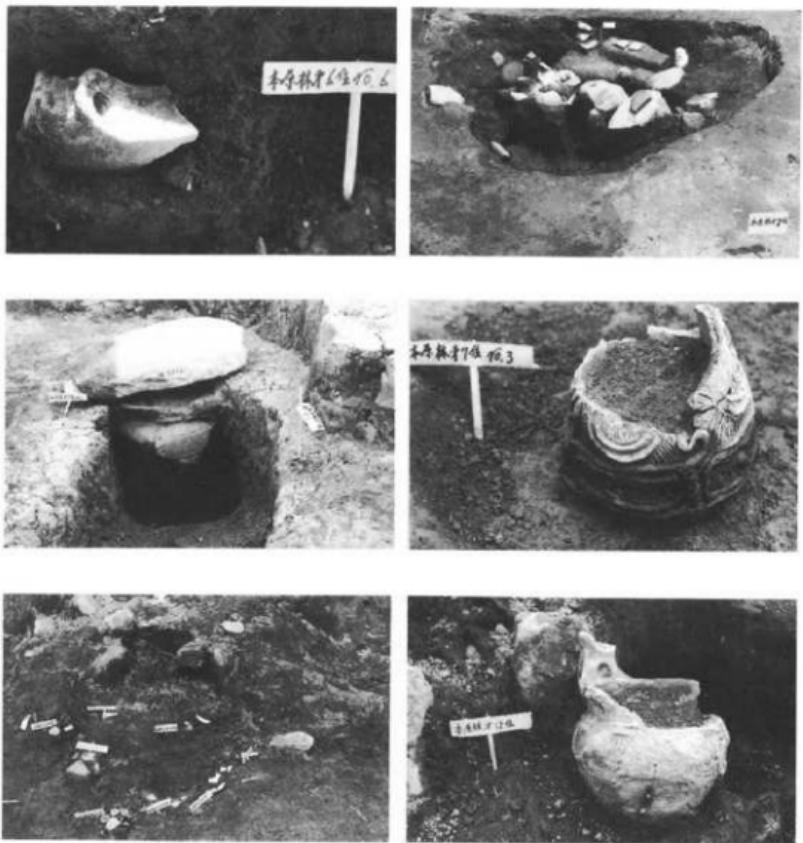
P 15 第11号住居址土器出土状況



P 16 土器出土状况



P 17 土器出土状况



P 18 土器出土状况

田切平沢遺跡

目 次

目次、挿図目次、図版目次

第Ⅰ章 遺跡の概観	(2)
第1節 位置	(2)
第2節 地形・地質	(2)
第Ⅱ章 発掘調査の経過	(4)
第1節 発掘調査に至るまで	(4)
第2節 調査日誌	(4)
第Ⅲ章 遺構・遺物	(5)
第1号住居址	(6)
第Ⅳ章 まとめ	(10)

挿 図 目 次

第1図 位置図 (1 : 100000)	第2図 地形図 (1 : 2000)
第3図 遺構配置図 (1 : 400)	第4図 第1号住居址平面図 (1 : 60)
第5図 第1号住出土土器 (1 : 4)	第6図 第1号住出土遺物 (1 : 3)

図 版 目 次

P 1 第1号住居址	P 2 遺跡全景
P 3 調査風景	P 4 土器出土状況
P 5 土器出土状況	P 6 石器出土状況

第1章 遺跡の概観

第1節 位置

田切平沢遺跡は、長野県上伊那郡飯島町大字田切 2312 番地に所在する。遺跡は、中央アルプス扇状地の扇端部、天竜川の河岸段丘上に位置する。遺跡に至るには、国鉄飯田線田切駅で下車し、東南へ約 2 km ほど歩いたところである。遺跡の中心で標高 560 m をはかる。

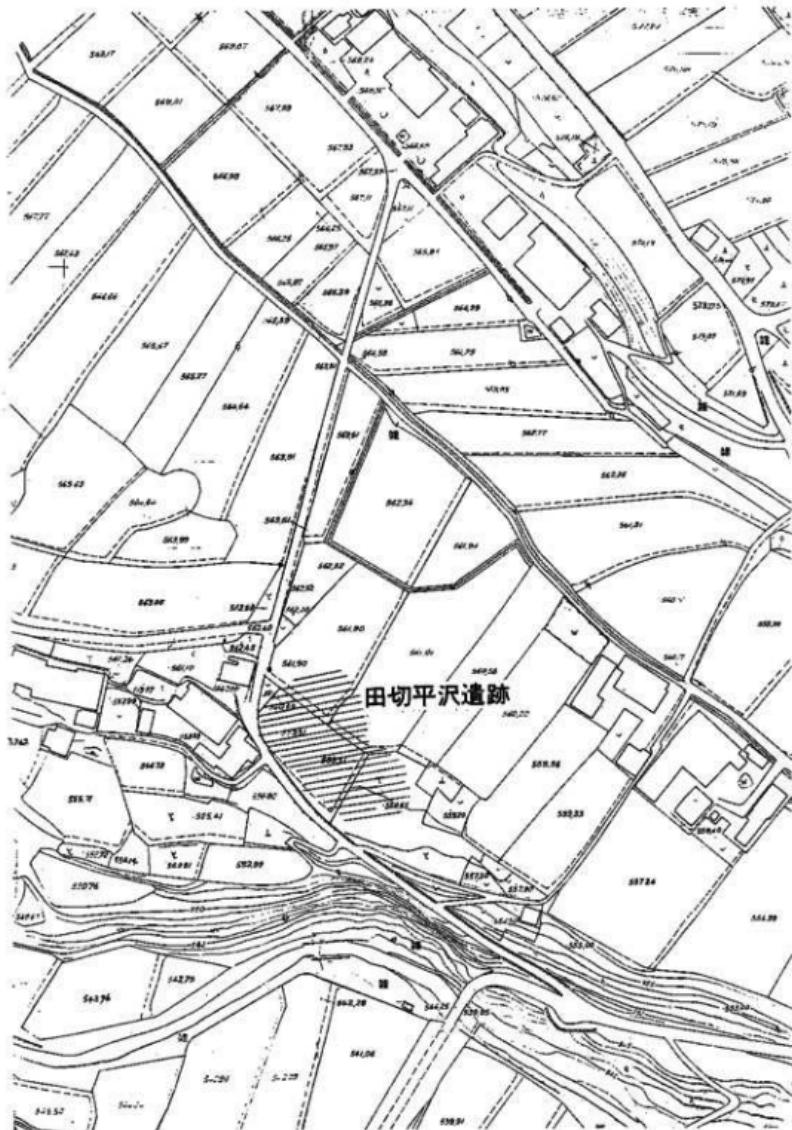
第2節 地形・地質

当遺跡は、天竜川・中田切川により形成された河岸段丘上にあり、南側は郷沢川に向って傾斜している。

調査地区の上層については、水田、桑園により搅乱されており、礫層の基盤の上にローム層、砂疊層、耕作土層が堆積していたものと思われる。



第1図 位置図 (1 : 100,000)



第2図 地形図 (1 : 2000)

第Ⅱ章 発掘調査の経過

第1節 発掘調査に至るまで

県営は場整備事業田切地区第33工区にある田切平沢遺跡の埋蔵文化財緊急発掘調査を飯島町では、飯島町遺跡調査会に委託し実施した。

〔飯島町遺跡調査会〕

会長 熊崎 安二 (教育長)

理事 片桐 修 (飯島町文化財調査委員)

宮下 静男 (")

北原 健三 (")

桃沢 匠行 (")

松崎 研定 (")

中島 淑雄 (")

片桐 佳彦 (")

小林 嘉男 (")

監事 池上 勇 (飯島町監査委員)

中野 武司 (")

幹事 吉沢 内次 (飯島町教育委員会教育次長)

米沢 長実 (" 係長)

伊藤 修 (" 主事)

宮下 淑江 (" 主事)

〔発掘調査団〕

団長 友野 良一 (日本考古学協会員)

調査員 伊藤 修 (飯島町教育委員会主事)

" 和田 武夫 (長野県考古學会員)

第2節 調査日誌

田切平沢遺跡の調査における主だった項目を拾ってみた。

○調査は、昭和55年10月27日より着手し、昭和56年3月20日に完了した。

○調査は、調査地区全体に2m四方のグリッドを設定し行なった。

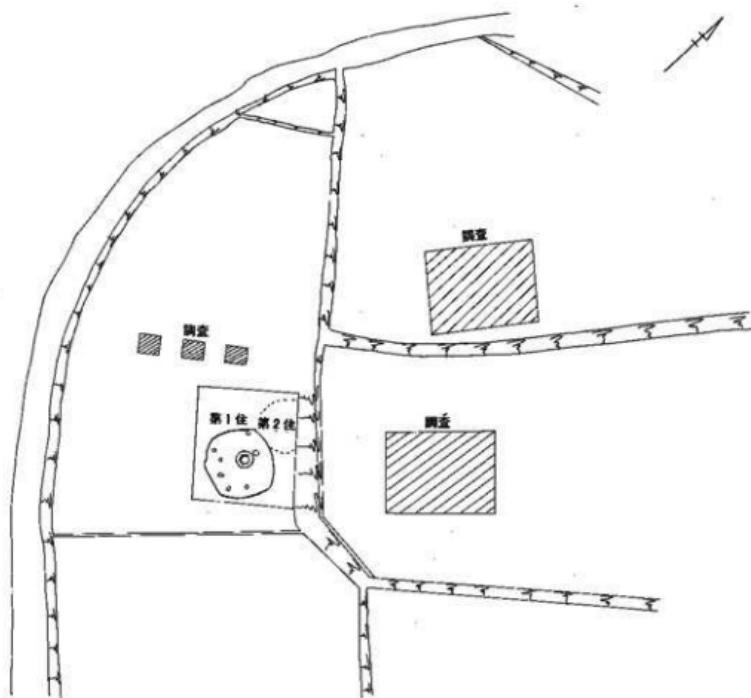
○遺物について、主要なものは平面図出土点、出土高等を記録した。

○遺構については、平面図の他にできる限り遺構断面の土層も記録を行なった。

第Ⅲ章 遺構・遺物

遺跡は開田により相当破壊されたものと思われる。

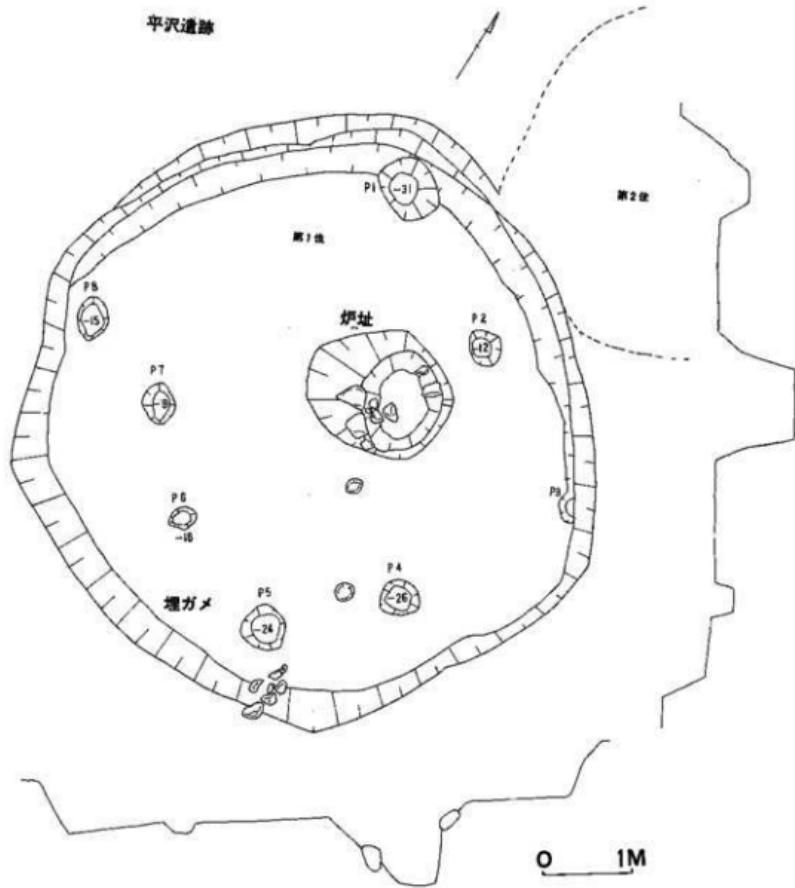
今回の調査では住居址が1箇所検出された。また第1号住居址の北側に隣接して第2号住居址が検出されたが破壊されており遺構の確認のみにとどめた。



第3図 遺構配置図 (1 : 400)

第1号住居址

調査地区の中央部に位置する。直径約6m 50cmの円形を呈する住居址である。住居址は砂礫層を深く掘り込んで造られており、壁はゆるやかな傾斜がみられる。住居址北側半分には周溝が巡らされている。柱穴はP₁～P₈の8箇所が確認された。P₁、P₅、P₆は主柱穴と考えられる。炉址は住居址中央やや東側に位置し、大形の深いものである。底部には焼土がみられた。炉石は抜き取られ、僅かに残っている。住居址南東床面には埋甕がみられる。遺物の出土は、覆土、床面とも多い。いずれも縄文時代中期後半のものである。



第4図 第1号住居址平面図 (1 : 60)

表 第1号住出土石器一覽表

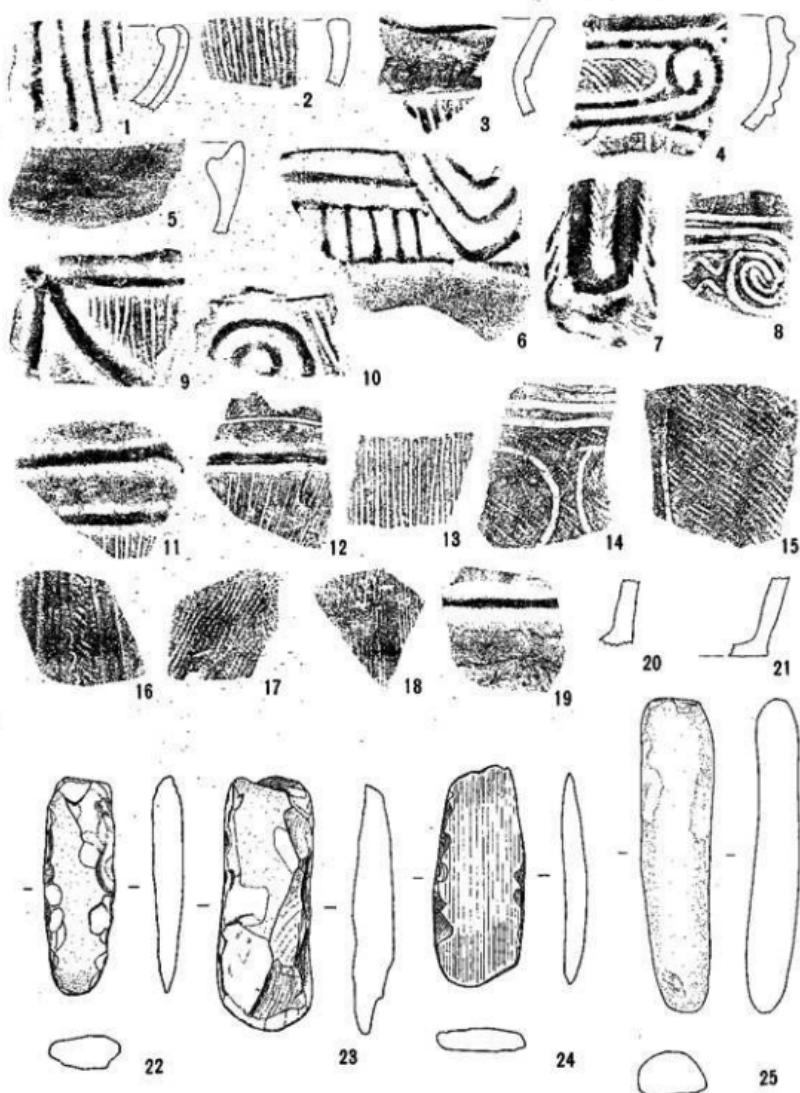
名 称	完 形	欠 構	合 計
打製石斧	17	10	27
磨製石斧	2	0	2
石 匙	2	0	2
磨 石	7	0	7
横刃形石器	8	13	21
黑曜石片		35	35



► 第5圖 第1号住居址出土土器 (1:4)



P1 第1号住居址



第6図 第1号住出土遺物 (1 : 3)



P 2 遺跡全景



P 3 調査風景



P 4 土器出土状況



P 5 土器出土状況



P 6 石器出土状況

第Ⅳ章 まとめ

田切平沢遺跡は、飯島町大字田切2312の1番地に所在する遺跡である。

遺跡は、郷沢川の左岸段丘上南斜面に位置する。郷沢川をへだてて右岸段丘上には室町～戦国時代の城址である唐沢城がある。唐沢城からは、中世の遺物の他に縄文時代中期の土器片が発見されている。また唐沢城の西には石曾根堂前遺跡があり縄文時代中期、平安時代の集落が確認されている。当該遺跡は、これらの同時代の遺跡群のなかに位置する。

調査地区は、水田造成時に傾斜面を1.5m程削り取っており遺構は相当破壊されたものと思われる。住居址は2軒確認されたが、1軒は造成時に破壊された。

住居址は、東西6.5m、南北6.5m、深さ40cmの堅穴住居址であり、炉石の抜き取られた石圓炉である。遺物は、住居址覆土より比較的多く出土した。

埋甕は、住居址南東の壁付近より出土した。口径27.5cm、高さ41cm、口縁部無文帯、頸部に4箇所5cm程の粘土による繩を垂下し、その間は横位に隆線が施され、壺状器具による刺突文と、隆線状の波状文が交互に施され、その下には8区画された楕円文がめぐらされている。胴部には蕨手状の大柄な懸垂文が下り、その間を綾杉文がうめられている。曾利II式に比定される土器である。

報告書の刊行にあたり、多くの方より献身的な御支援をいただいたことに対して心より感謝の意を表するものであります。

(団長 友野良一)

高尾第1，本郷原林，田切平沢

-緊急発掘調査報告-

昭和56年3月15日 印刷

昭和56年3月20日 発行

発行所 長野県上伊那郡飯島町

印刷所 藤原印刷株式会社
松本市新橋7-21
TEL 0263(33) 5092(代)

